

欧州議会の動向と展望

渡 邊 頼 純

1. 欧州議会の構成

欧州議会はEU加盟国の有権者による直接選挙によって選出された626名の議員によって構成されている。EC12ヶ国の時は567名であった。1995年1月の第4次拡大の際、各加盟国ごとの選出議員数を修正し、国別議員数を次のようにした。(原則的には人口比をもとに決められている。)

ドイツ99、フランス、英国、イタリア各87、スペイン64、オランダ31、ベルギー、ギリシャ、ポルトガル各25、スウェーデン22、オーストリア21、デンマーク、フィンランド各16、アイルランド15、ルクセンブルク6。

欧州議会議員の任期は5年で、加盟国の国会議員との兼職も認められている。

議員は政治的信条に基づいて結成された、国境を越えた政治グループを形成している。現在のグループ数は9、他に無所属のグループがある。最大グループは社会主義グループで221名、第二の勢力は欧州人民党グループの173名であり、この二つの勢力で全議員数の約6割強を占めている。その他の政治グループの名称と人数は以下の通りである。

自由民主改革グループ(52名)、欧州左派グループ(31名)、「がんばれ欧州」グループ(29名)、欧州民主同盟グループ(26名)、「緑の党」グループ(25名)、「諸国家の欧州」グループ(19名)、急進欧州同盟グループ(19名)、無所属(31名)。

これまで直接選挙は4回実施され、それぞれ投票率は1979年の62.5%を最高に、1984年59%、1989年57.2%、1994年(6月)56.8%と少しずつ低下してきている。

議会運営の仕方としては、本会議をストラスブールで毎月約1週間の会期で開催、その際には欧州委員会の委員達も議員からの質問に答えたり、討議に参加するためにストラスブールに赴くことになる。なお、欧州議会の事務局はルクセンブルクにあり、約3,800人の職員が勤務している。

本会議の他に、政治、予算、農漁業、食糧、外交・安全保障、対外経済関係など20の委員会があり、本会議の準備作業は、これら各種委員会の事務局のあるブリュッセルで行われる。ここにも欧州委員会の委員を始め、事案に関連する委員会の課長クラ

ス以上の職員が出席し、議員との質疑に応じることがよくある。

2. 欧州議会の権限

行政府としての欧州委員会に対し諮問・監督を行う機関として位置づけられる。主な権限としては次のようなものがある。

(1)予算案の修正（非義務的支出については最終決定権を持つ。他方、予算全体の4分の3を占める「義務的支出」、つまり条約に基づき採択されたEUの決定により必然的に生じる支出については修正案を提出することができる。）

(2)決算の承認

(3)加盟条約への同意（1987年の単一議定書により規定されたもの）

(4)連合協定への合意

(5)立法過程における権限：マーストリヒト条約（以下、「マ」条約）の発効により大幅に強化されているが、以下の3方式に整理することができる。なお、(i)と(ii)の手続き自体は1987年発効の欧州単一議定書により規定された。

(i)「合意手続き」適用対象の拡大：新規加盟の承認、連合協定の締結、欧州議会の統一選挙手続き、人の自由移動・居住の自由、構造基金の改革、結束基金の設立、ESCB（欧州中央銀行制度）・ECB（欧州中央銀行）

(ii)「協力手続き」適用対象の拡大：経済政策のサーベイランス、運輸政策、社会政策、欧州社会基金、労働環境の改善、環境政策、研究開発など

(iii)「共同決定手続き」の新設：従来、「協力手続き」が適用されていた域内市場の完成、労働者やサービスの自由移動、消費者保護、住居の権利、文化・教育政策、公衆衛生（「調停委員会手続きと拒否権」として「マ」条約189条bに規定）

(6)「マ」条約により委員会に対する法案提出請求権、

(7)委員会の承認、

(8)その他、「マ」条約により個人・法人の苦情を受け付けるオンブズマンの任命、共同体法実施に関する臨時調査委員会の設置等が規定されていた。

3. 選挙制度

(1)欧州議会議員は当初、加盟国国会議員間の互選により選出されていたが、議会に加盟国国民の声を直接反映させ、議会の民主的統制機能を高めるため、1975年12月の欧州理事会は1978年に欧州議会の直接選挙を実施することを決定した。1976年9月EC外相理事会は直接選挙の大枠を定めた「欧州議会直接選挙に関する決議」を採択、同決議は加盟各国議会の批准を経て、「直接選挙法」として1978年7月より発効した。

この選挙法は、議席の国別配分、議員の任期、兼職禁止規定等を規定しているが、選挙方法は各国の裁量に委ねており、EEC 条約第 138 条に定める本格的な「一律の手続きによる直接選挙」の実現は、今後の改題として残されている。なお、現在までのところ、欧州議会議員の報酬も加盟国が負担し、欧州議会により議員達に支払われるのはあくまでも旅費や事務費に限定されている。

(2)各国の選挙制度は、英国を除き全て比例代表制をとっている。選挙区を全国区のみとしているのは、フランス、ドイツ、オランダ、ルクセンブルク、デンマーク、スペイン、ポルトガル、ギリシャ等である。ベルギー、アイルランド、イタリア等は複数選挙区制を採っている。なお、ドイツにおいては、各政党は候補者リストを全国一律とするか州別とするかを選択することができ、実際にはキリスト教民主・社会同盟（CDU・CSU）は州別リストを採用しており、国全体で獲得した議席を州毎に配分している。また、英国においては原則的に小選挙区制（84 選挙区）であるが、北アイルランドの 3 議席についてのみ比例代表制を採っている。

(3)選挙権については、各国とも 18 歳以上となっている。被選挙権は、英国、ベルギー、ルクセンブルク、アイルランド、ギリシャが 21 歳以上、フランスが 23 歳以上、イタリアが 25 歳以上、その他各国は 18 以上となっている。なお、マーストリヒト条約により「EU 市民権」の概念が導入され、1994 年の第 4 回選挙から本国以外の EU 加盟国に居住している EU 市民（約 500 万人）も居住国において欧州議会選挙の選挙権・被選挙権を認められるようになった。

(4)欧州議会議員との兼職が禁止されているのは直接選挙法第 6 条によれば以下の職にあるものである。

加盟国政府の閣僚

欧州裁判所判事

ECSC 諮問委員会メンバー並びに経済社会委員会メンバー

欧州投資銀行職員

欧州委員会委員並びに同職員

会計検査院職員

EC 諸機関・専門機関の職員

加盟国が独自に決定する兼職禁止の規定の対象となるもの（この一例としては、ギリシャ、スペイン、ベルギーにおいて国会議員との兼職を禁止している規定などがある。）

4. 最近の動向

(1) 第 4 回直接選挙（1994 年 6 月）

マーストリヒト条約により欧州議会の権限が強化されて最初の選挙であったにもか

かわらず、投票率は過去最低の56%に留まった。右選挙では社会主義グループと欧州人民党の2大勢力が全議席に占めるシェアを落としたのに対し、既存の政治グループに属さない議員が100名近く選出され、「がんばれ欧州」、「諸国家の欧州」等の振興の政治グループを形成した。他方、フランス、デンマークでは「もう一つの欧州」、「EC反対運動」等欧州統合反対派が投票を伸ばした。

(2) スウェーデンにおける選挙 (1995年9月17日)

95年1月の第4次拡大の際には欧州議会の議員定数も従来の567から626に増大しているが、欧州議会議員は暫定的に新規加盟国の国会議員により代表されることになっていた。これら新規加盟国については加盟から2年以内に欧州議会のための直接選挙を実施することになっていた。

スウェーデンにおいてはいち早く直接選挙が実施され、欧州議会議員22名が選出された。ただし、投票率は41.3%、与党社民党は投票率28.2%(94年総選挙の際は45.4%)と著しく不振であった。他方、EU加盟反対派の環境党は17.2%の投票率で議席数を1から4に増やし、同じく加盟反対派の左翼党も議席数を1から3に増やした。このように選挙結果は事前の世論調査の予想以上に社民党にとって厳しいものとなった。

かかる結果の背景としては、EU加盟8ヶ月を経た時点で加盟によるポジティブな成果が生活の中で実感できないことに対する不満(食料品の値段が依然として高止まり、失業率が下がらないことなど)、初めての欧州議会選挙で有権者が不慣れだったこと、選挙制度が新しく、しかも複雑であったこと、この1年で3度目の選挙であったことなどがあげられている。

5. 今後の展望

単一欧州議定書、マーストリヒト条約の発効により欧州議会の民主主義的コントロールの能力は飛躍的に高まったと言える。それ自体は欧州統合の本来目指してきた方向と一致するので高く評価されて当然と言えよう。しかし、他方では既存政党とは一線を画した新興の政治勢力が、必ずしも国内ではそれ程高い支持を与えられているわけではないにもかかわらず、欧州議会選挙である程度の票を集める傾向も出てきている(ベルナール・タビの「急進エネルギー党」、イタリアの「がんばれ、イタリア」など)。かかる傾向は欧州統合が発展し、制度化が進めば進ほど、より複雑化したEUに対する反発として顕著になる可能性がある。

今後通貨統合、司法協力、環境問題など、域内国民のナショナリズムを刺激し、かつセンシティブな問題をEUレベルで解決していくことが要請される際に、統合と民

主的コントロールを如何に両立させていけるかに今後の「民主的欧州」の展開がかかっていると言える。欧州議会は重要な鍵を握っているが、欧州議会の権限強化は場合によっては「両刃の剣」になる可能性も排除できない。

6. 日・EU 議員会議

(1)欧州議会は日・EU 関係にも強い関心を有し、対外経済関係委員会及び本会議において適宜討議を実施してきており、ここ 20 年間で本会議において 10 本を超える対日関係決議を採択している。

(2)欧州議会の中には対日交流議員団があり、また、日本側にも国会内に日・EU 友好議員連盟（会長：羽田孜前総理）があって、双方の議員を中心に毎年日・EU 議員会議（EP/JAPAN INTERPARLIAMENTARY MEETING）が開催されている。第一回会議は 1978 年で、1995 年 2 月に第 15 回会議がブリュッセルで開かれている。開催地は東京と EU 内の都市（ストラスブール、ルクセンブルグ、当地）において毎年交互に回り持ちになっている。

(3)会議の性格としては、政治、経済、文化、科学技術等広範な範囲に渡る諸問題について参加議員の間で日・EU 関係並びに世界的な観点から大所高所の議論を自由に行う場となっている。

(4)第 15 回会議では、(1)日・EU 双方の政治情勢、(2)日・EU 関係全般、(3)国際協力並びに安全保障問題等を中心に意見交換。日本側代表団一行はサンテール委員長、ブリタン副委員長、ヘンシュ欧州議会議長他を訪問した。その他フランスのリール市を併せ視察した。また、第 16 回会議は 1995 年 11 月 20-21 日日本において開催された。欧州議会側議員団は羽田元総理の地元である長野県を訪問し、冬季オリンピックの会場視察などを行っている。

(以上)

(1994 年 7 月 21 日 ヨーロッパ研究センター月例研究会にて発表したものに加筆・修正を加えた。)

〈参考文献〉

- 金丸輝男『ヨーロッパ議会——超国家的権限と選挙制度』成文堂 1982 年
藤原豊司・田中俊郎『欧州連合——5 億人の巨大市場——』東洋経済新報社 1995 年
R. Corbett, F. Jacobs, & M. Shackleton *The European Parliament* (3rd edition), Cartermill Publishing 1995.

Stéréotype des Européens par les Japonais du XVIème siècle à nos jours

Masami Hamana

Les Européens, de la peur à l'idéalisation

Vous savez sans doute que le Japon a fermé ses portes aux étrangers au XVIIème siècle et ce, pendant trois cents ans. Cette isolation posait deux grands problèmes : d'une part, il y avait un aspect positif, le Japon ayant réussi à se défendre contre la colonisation des Espagnols et des Portugais, en comparaison des autres pays de l'Asie du sud-est. Dans ce sens le Japon est souvent assimilé à l'Angleterre en tant qu'île. Mais d'autre part, le Japon fut isolé du développement de la civilisation matérielle de l'Occident pendant trois cents ans.

À l'époque de Meiji, il y a cent ans environ, les Japonais avaient idéalisé l'Europe et les Européens en tant que modèle de la modernisation de la société japonaise. Ils croyaient que tout ce qui était avancé était bien, puisqu'ils se rendaient compte que le Japon était très en retard du point de vue industriel et technique par rapport à l'Occident.

Momotaro, nouvelle version

Avant de parler de notre point de vue vis-à-vis des étrangers, je voudrais présenter ici une nouvelle version d'un conte japonais récemment diffusé dans un programme de télévision destiné aux enfants. Il s'agit là d'une nouvelle interprétation très moderne du célèbre conte "Momotaro" de l'époque d'Edo.

Dans le conte traditionnel, Momotaro est un jeune garçon né, non pas du ventre de sa mère, mais d'une grosse pêche qui flottait sur la rivière. Recueilli par un vieux couple sans enfants, il mène, jusqu'à l'adolescence, une vie oisive et nonchalante. Ce seront les attaques et le pillage continus du village par une bande d'"oni", mi-diables, mi-croquemitaines venus d'une île lointaine, qui le feront sortir de sa torpeur. Momotaro part donc combattre les "oni" avec pour

seuls compagnons un chien, un singe et un faisan rencontrés en chemin. Il vaincra les “diables” de l’île et rapportera leur trésor aux villageois dépouillés. Momotaro, connu de tous au Japon, est le symbole du courage et de la virilité et on le donne souvent en exemple aux petits garçons.

Les personnages principaux de la série diffusée hebdomadairement à la télévision, sont Doraemon, robot magicien en forme de chat qui vient du XXII^{ème} siècle et Nobita, écolier japonais type, paresseux, pas très intelligent mais gentil, un peu comme l’était Momotaro dans son enfance.

Dans le conte télévisé, Nobita se transforme en Momotaro, et va, avec l’aide de Doraemon et de sa magie combattre les “oni” de l’île. Il réussit à attraper l’“oni” rouge qui terrorisait les villageois mais celui-ci lui dit en pleurant : “J’ai faim, je n’ai pas d’argent ; je suis donc obligé de voler du pain aux villageois. Lorsque je me présente au village, tout le monde a peur de moi. On me traite de “aka oni”, diable rouge. Mais je ne suis ni un diable ni un monstre. Je suis le capitaine hollandais d’un navire naufragé. J’ai perdu mon bateau, je ne peux plus rentrer chez moi. Mon pays natal me manque beaucoup.”

Ce monstre n’était en réalité qu’un étranger inoffensif et gentil perdu parmi les Japonais.

Et il est vrai que, pour les Japonais, les étrangers ont le visage et la peau rouges. D’autre part, comme ils sont beaucoup plus grands que les Japonais moyens, on les prend souvent pour des “monstres-géants”. Leur apparence physique effraie les Japonais qui ne sont pas habitués à ces débordements charnels. C’est parce que les étrangers sont synonymes d’inconnu autant que d’étrangeté, qu’ils suscitent tant de crainte. Mais attention, pour les Japonais, “étranger” ne signifie pas “Asiatique” ou “Africain” mais “Occidental”, donc “blanc”. Il est indéniable qu’il y ait là une ségrégation certaine.

L’importance de la traduction

Afin de comprendre l’attitude du Japon moderne vis-à-vis des étrangers, il faut tout d’abord se pencher sur le passé et l’introduction de la culture étrangère, à la fin du XIX^{ème} siècle, dans un pays fermé à toute ingérence extérieure depuis trois siècles. Cette étude se fera à travers l’histoire de la traduction depuis l’ère de Meiji, c’est-à-dire depuis l’ouverture du Japon en 1868.

Dès le début de l’ouverture, les intellectuels japonais furent conscients du

retard de leur pays par rapport à l'Occident. On avait besoin de savoir tout ce qui se passait à l'étranger, surtout en Europe, modèle idéal pour le Japon. Au début de l'ère de Meiji, le Japon invita donc de nombreux professeurs occidentaux spécialisés dans différents domaines. Gustave-Emile Boissonade de Fontarabie, par exemple, fut invité par le gouvernement pour établir le système du Droit moderne au Japon. Mais la victoire de l'Allemagne de Bismarck fit pâlir l'étoile de la France et ce sont finalement des juristes allemands qui remplacèrent Boissonade dans l'élaboration du code civil japonais.

L'enseignement, quant à lui, se faisait alors en langues étrangères, l'anglais, le français ou l'allemand. Apprendre les langues occidentales était la voie la plus rapide vers la réussite sociale pour les Japonais de l'époque. Mais bientôt le Japon se lança dans la traduction des textes occidentaux.

Le Japon moderne commence avec la traduction des textes occidentaux. Sans traduction, le Japon actuel n'existerait pas.

Depuis la traduction de la civilisation chinoise en japonais, les Japonais ont prouvé qu'ils étaient de grands traducteurs. La rapidité de la modernisation du Japon vient de la traduction et de l'enseignement supérieur effectué en japonais et non en langue étrangère grâce au développement de la traduction. A l'époque, la formule "le talent à l'occidentale, l'âme à la japonaise" était déjà à la mode. Avec la montée du nationalisme, le Japon commença à expulser les professeurs étrangers. A l'Europe, qui avait servi de modèle à la modernisation, on avait emprunté sa civilisation mais pas sa mentalité.

Il y a, à mon avis, trois attitudes différentes vis-à-vis des occidentaux depuis le XVIème siècle jusqu'à nos jours : 1) La peur vague. 2) L'idéalisation à outrance. 3) La vision précise liée de nombreuses connaissances exactes.

Je vais retracer, maintenant, les grandes lignes de nos différentes attitudes envers les Occidentaux. Tout d'abord, il faut parler d'un certain prêtre portugais : Luis Frois au XVIème siècle au Japon. Mais avant de parler de lui, dans les manuels scolaires de l'histoire du Japon, on parle de l'arrivée du père Francisco de Xavier naufragé à Tanegashima, île au sud du Japon en 1549. C'est après l'introduction de l'arquebuse en 1543, la première apparition du christianisme au Japon, avec un navire portugais naufragé. L'année suivante, un navire de commerce portugais arriva à Nagasaki. On dit que c'est la première rencontre des Japonais avec les Occidentaux. Les premiers Européens étaient donc des Portugais.

Luis Frois (1532-1597), prêtre portugais, avait écrit un journal intime dès son arrivée au Japon en 1562. Pendant trois siècles, on ignora son manuscrit, mais en 1955, son journal fut publié en portugais par l'Université Sophia (C'est une université créée par les jésuites) au Japon et ensuite fut traduit en japonais en 1965. Ce journal s'intitule *«La culture européenne et la culture japonaise»* (éditions Iwanami). En 1991, il a été enfin édité en livre de poche. Il s'agit d'une étude anthropologique des Japonais du XVI^{ème} siècle comparés aux Européens.

Au début de son journal, Frois compare la différence de physionomie entre les Européens et les Japonais. Pour lui, c'est le premier point qu'il remarque. Jusque-là les Japonais ne connaissaient pas du tout les Européens. D'après Frois, *«les Européens sont en général grands et forts. Les Européens trouvent les grands yeux beaux, mais les Japonais les trouvent effrayants»* (p. 15). *«Notre nez est long, continue-t-il, certains ont le nez aquilin . . . En général, les Européens portent une barbe très riche.»* En réalité, les Japonais avaient peur des Européens qu'ils n'avaient jamais vus jusque-là. Le Shogun Nobunaga, contemporain de Philippe II d'Espagne, était un homme plein de curiosité. Dans les années 1560, il se heurtait au mouvement des révoltes religieuses comme Philippe II avec la guerre de Grenade. Pour réprimer les forces de la religion bouddhique, Nobunaga s'intéressa à la fois au christianisme et au fusil. Et il donna à Frois la permission de résider dans la capitale en 1569. Cela voulait dire que la diffusion du christianisme avait été autorisée par Nobunaga. Frois fut cependant expulsé de la capitale au nom de la loi qui expulse tous les *«Bateren»* (les chrétiens) en 1587, après l'assassinat de Nobunaga par un de ses fidèles et l'arrivée au pouvoir de Toyotomi Hideyoshi.

Sur le Japon du XVI^{ème} siècle, Fernand Braudel écrit : *«Il semble que les maîtres du Japon aient pris peur des Occidentaux. Les Portugais, arrivés les premiers, avaient touché Kiou Siou en 1543. Canons, arquebuses, énormes navires impressionnèrent les insulaires ; plus encore les nombreuses conversions au christianisme obtenues presque aussitôt par les nouveaux venus. Cette religion allait-elle favoriser les révoltes des grands seigneurs et des paysans, comme ce fut un peu le cas en 1638 ?»* (*Grammaire des civilisations*, p. 329, Champs Flammarion)

Frois note aussi la différence entre les femmes. *«Les Européennes sont fières d'avoir les cheveux blonds, sinon elles font des efforts pour être blondes. Par contre les Japonaises détestent les blonds et font des efforts pour avoir les cheveux noirs.»* Vu le changement des Japonaises depuis le XVI^{ème} siècle, cette

remarque est intéressante, car les jeunes Japonaises de maintenant ont souvent grande envie d'avoir les cheveux blonds comme les Européennes. Certains garçons, souvent réputés "outsiders", ont même tendance à se teindre les cheveux en roux.

En ce qui concerne les jeunes filles, l'observation de Frois est remarquable. «En Occident, il est très important, dit-il, que les jeunes filles ou les vierges restent strictement enfermées dans la maison. Au Japon, les jeunes filles sortent toutes seules pendant un ou plusieurs jours sans rien dire à leurs parents.» Cette observation est très significative. Cela prouve que les Japonais étaient un peuple indulgent. Au XVI^{ème} siècle en Occident, à l'époque de la Réforme, la contre-Réforme avait tendance à être sévère vis-à-vis du peuple du point de vue de la morale. Mais au Japon, on ne connaissait pas encore le confucianisme qui allait longtemps dominer la morale des Japonais et ce, jusqu'à nos jours. Je crois qu'il y eut une rupture épistémologique entre la fin du XVI^{ème} siècle et le début du XVII^{ème} siècle au Japon. D'ailleurs, les Japonaises d'autrefois étaient beaucoup plus libres que les Européennes. Frois dit que «en Europe, les femmes ne sortent pas de la maison sans autorisation de leur mari. Les Japonaises ont la liberté d'aller n'importe où, sans avertir leur mari». Les Japonaises se font enfermer à la maison à partir de la fermeture des portes aux étrangers, à l'époque d'Edo.

En ce qui concerne l'alcool, si les Européens se sentent honteux quand ils boivent à en perdre connaissance, «les Japonais en sont fiers . . . » (p. 101) dit Frois. Maintenant encore, il n'est pas rare de voir des Japonais ivres dans les rues, mais pas des Européens.

«Nous avons l'habitude de nous embrasser au moment de nous quitter ou de rentrer à la maison. Les Japonais n'ont pas du tout cette coutume, ils rient en voyant les baisers» (p. 186). C'est là toute la différence d'expression des sentiments entre les Européens et les Japonais. Frois reconnaît que les Européens expriment fortement leurs sentiments. En plus, les Européens essaient de parler clairement et d'éviter les expressions ambiguës. «Au Japon, au contraire, les mots ambigus sont les meilleurs et les plus respectés» (p. 188).

Quant aux relations humaines pour les Japonais, on commence à avoir des contacts avec d'autres personnes en "avouant", en parlant de soi, en "se confessant" (il ne s'agit bien sûr pas là de "confession" au sens chrétien du terme). C'est ainsi qu'on entretient des relations d'amitié. Les Japonais aiment la solitude et ne sont pas "sociables" comme on l'entend en Occident. (N'oublions pas que le mot

“société” n’existait pas dans le Japon d’avant Meiji.) Ils ne sont donc pas capables d’entretenir une conversation qui aboutisse à une communication mutuelle. . . Ils ont cependant besoin de se “faire comprendre”. Ainsi, ils aiment être à la fois solitaires mais non pas complètement isolés des autres. Ils se sentent en sécurité une fois intégrés dans une communauté, aussi petite soit-elle. On prétend même que “l’on se comprend en silence, sans se dire un mot.” Il n’y a pratiquement pas de conversation entre le mari et la femme. On dit souvent que dans un couple trois mots sont échangés : “bain, repas, dodo”.

Il y a aussi une distinction très nette entre “l’intérieur” et “l’extérieur”. C’est pourquoi les étrangers sont appelés “gaijin”, hommes de l’extérieur. Et tant que l’on reste “à l’intérieur”, soit d’une famille, soit d’une société, on n’a pas besoin de parler pour se faire comprendre. Puisque “à la maison” (uchi), qui signifie aussi l’intérieur du groupe, la communication se fait soit au moyen de quelques mots, soit d’un simple regard, point n’est besoin de discuter longuement, de raisonner. Autrement dit, les Japonais préfèrent la compréhension globale et sentimentale à la discussion cartésienne.

Frois avait justement remarqué ce point, en disant que, 《en Europe, l’amour entre les intimes s’exprime clairement, mais qu’au Japon, un couple exprime rarement son amour mutuel et que les Japonais agissent l’un vis-à-vis de l’autre comme des étrangers》 (p. 50). On répète souvent la même chose même maintenant. Lorsque le mari dit 《Je t’aime》 à sa femme à plusieurs reprises, elle pourrait douter qu’il ait une maîtresse.

L’Europe, modèle idéale pour les Japonais

Pendant la période d’isolement à partir de 1639 où le gouvernement défendit l’entrée des navires portugais, les Japonais ne connaissaient que les Hollandais à Nagasaki, le seul port ouvert aux étrangers, Dejima. Oomura Masujiro, à la fin de cette période (au XIX^{ème} siècle), pensait qu’il devait connaître la situation du monde entier à travers la langue hollandaise. D’après Donald Keene, japonisant américain, 《à Dejima, les gens considéraient la Hollande comme le centre de l’Europe. Et pour les Japonais la Hollande était le seul pays européen》 (*Les Japonais et la culture japonaise*, 1972, Chou-Koron). Les Hollandais que les Japonais fréquentaient à Nagasaki étaient des commerçants, sauf un médecin allemand qui introduisit la médecine européenne, surtout la chirurgie, au Japon.

En 1857, le gouvernement des Tokugawa invita officiellement un professeur de médecine allemand. En réalité, la Hollande n'était plus qu'un petit pays à la fin du XIX^{ème} siècle. Certains intellectuels, Nishi Amane, philosophe, et Mori Oogai, médecin et écrivain, par exemple, apprenaient déjà l'anglais, le français, l'allemand et le russe. Et Fukuzawa Yukichi, fondateur de l'Université Keio, comprit que pour connaître la situation exacte du monde il était nécessaire d'apprendre l'anglais, et non plus le hollandais. En effet, Earnest Satoh, premier secrétaire anglais, influença beaucoup la modernisation du Japon.

Au commencement de l'ouverture du pays, l'Europe était un modèle pour le développement du Japon. Quand on parlait de l'Europe à cette époque, les Japonais pensaient à l'Angleterre, à la France, à l'Allemagne et à la Russie. Ce qu'il est intéressant de noter, c'est que les Japonais de l'époque de Meiji considéraient la Russie comme un pays occidental. Par ailleurs la littérature russe a beaucoup influencé le développement de la littérature japonaise moderne.

De la haute culture à la culture populaire

Je reviens maintenant au problème de la traduction.

Au début de l'ère Meiji, la traduction était soit une adaptation, soit un extrait d'une œuvre. N'étaient traduites que les parties "convenables" d'un livre. Pendant la guerre, il était interdit d'utiliser les langues étrangères et on n'avait aucune information sur l'étranger. De nos jours, les traductions sont intégrales et s'étendent à tous les domaines. On trouve des traductions de romans français même dans les manuels scolaires japonais.

Mais le foisonnement des traductions ne se limite pas à la "haute culture" : à côté des traductions destinées à une élite intellectuelle, s'est développé un marché très riche qui s'adresse aux masses populaires. Exemple de cette nouvelle culture populaire, on a la traduction d'*Astérix*, effectuée par de grands professeurs de l'Université de Tokyo. La traduction d'*Astérix* a cependant été un échec à cause du manque de connaissances de la culture européenne. Il avait fallu ajouter des commentaires à de nombreuses phrases mais il est certain que dans une bande dessinée, un commentaire ne sert pas à grand chose. On trouve les traductions de bandes dessinées comme *Tintin* ou on a également tourné un dessin animé adapté des *Trois Mousquetaires* qui a remporté un grand succès populaire.

Je dois ajouter qu'il est amusant de connaître les expressions employées par

les Japonais en ce qui concerne les Européens. Depuis le XVIème siècle jusqu'à l'ouverture forcée du pays par les Etats-Unis, les Japonais appelaient les Européens (en réalité les Portugais et les Espagnols) Barbares du sud (Nanbanjin). A la fin de l'époque d'Edo, le gouvernement créa une école de traduction qui faisait des recherches sur la situation du monde (cette école est devenue l'Université impériale de Tokyo à l'époque de Meiji). On l'appela 《Bansho-Torishirabe-jo》, c'est-à-dire <Ecole de recherches sur les livres occidentaux> (<Bansho> veut dire <livres barbares>). Dans cette appellation, chose curieuse, on voit que les Japonais ne se sentaient pas du tout inférieurs aux Européens.

Le modèle pour le Japon moderne, c'était évidemment l'Europe occidentale, surtout l'Angleterre, l'Allemagne et la France. Pour apprendre la peinture, on allait en France, pour l'économie en Angleterre, et pour la philosophie et la musique en Allemagne. Le mot à la mode, c'était 《le retour de l'Europe》. Ce phénomène pousse à vivre à la manière européenne dans tous les domaines sociaux, surtout les vêtements, l'architecture, la construction des villes, et la cuisine. Les Japonais qui n'avaient jamais goûté de viande commençaient à manger du bœuf avec des légumes. Cette cuisine est connue sous le nom du fameux *sukiyaki*.

Vint ensuite la création de la classe aristocratique et le commencement de l'époque de Rokumeikan. Dans la demeure appelée Rokumeikan, on donnait des soirées à l'occidentale : des bals en robes occidentales. Mais cela ne dura pas longtemps. La modernisation des mœurs avait lieu au niveau des hautes classes, pas au niveau du peuple. Les systèmes scolaire et militaire, en somme les grandes institutions, furent transformés, mais pas la mentalité du peuple.

A ce propos, comment définissait-on l'Europe ? 《L'Europe au sens strict, c'est au-delà des Alpes, du Rhin, de la Seine, au moins au nord de la Loire》 (Horigome Yozo, *Qu'est-ce que l'Europe ?*). D'après cette définition, il n'y a que trois pays : la France, l'Allemagne et l'Angleterre. Maintenant on y ajoute les pays qui font partie de l'Union européenne et les pays de l'Europe de l'est.

Revenons au moment de l'ouverture du pays. 《Le gouvernement des Tokugawa considéra France comme le pays le plus puissant du monde, la France ayant eu un héros comme Napoléon.》 (Shiba Ryotaro, écrivain) L'armée de terre fut donc formée à la française et la marine de guerre à l'anglaise.

Au passage, je vous signale l'attitude générale des Japonais vis-à-vis de la culture étrangère. Depuis l'introduction du bouddhisme au Japon, le peuple

japonais a tendance à respecter les choses incompréhensibles. Nakamura Gen, professeur éminent de bouddhisme dit qu' «il y a une attitude de culte aveugle de la culture étrangère depuis longtemps, mais qu'on n'a jamais traduit les textes saints du bouddhisme» . En effet les prières des bonzes sont incompréhensibles. Encore de nos jours on retrouve souvent ce phénomène parmi les intellectuels qui emploient des mots étrangers, surtout occidentaux, même si les Japonais standards n'en comprennent pas le sens. On a donc plusieurs dictionnaires qui traitent des mots qui viennent de l'étranger.

Par contre, à l'époque de Meiji, les intellectuels essayaient de traduire tout ce qui venait de l'étranger pour assimiler choses et cultures étrangères. Shimada Kinji, spécialiste de littérature comparée, osa dire qu'il n'y avait jamais eu d'originalité dans la littérature japonaise et que la littérature japonaise moderne n'était qu'imitation, traduction et adaptation. A mon avis, les Japonais sont doués pour imiter d'autres cultures et les assimiler facilement à la culture japonaise. Cela se voit surtout depuis l'époque de Meiji dans le développement du domaine scientifique et industriel grâce à la traduction et à l'enseignement fait en japonais.

Il y a un épisode qui démontre l'attitude curieuse vis-à-vis des étrangers. Dès que Lafcadio Hearn, écrivain anglais et professeur d'anglais, se fit naturaliser japonais, et que son nom devint Koizumi Yagumo, son salaire diminua de moitié. Cependant on a toujours un certain culte vis-à-vis des étrangers. Mais d'un autre côté, les professeurs étrangers n'arrivent pas facilement à avoir le même statut que les Japonais dans les universités d'Etat. Devenir professeur titulaire pour les étrangers est impossible. Les professeurs des universités d'Etat, les instituteurs, en tant que fonctionnaires, doivent avoir la nationalité japonaise.

Comment les Japonais regardent-ils les Européens ?

Je vais parler maintenant du stéréotype des européens dans le Japon d'aujourd'hui.

Tout d'abord, l'image des pays occidentaux dans les catalogues touristiques. Ceci va montrer le regard que portent les Japonais sur l'Europe.

Pour la France, on parle toujours de Paris, capitale des Fleurs, dans le sens symbolique de l'épanouissement de la culture et non Ville Lumière. Dans les années soixante-dix, un groupe de paysans japonais visita la France. Le voyage

durait une semaine en Europe. Trois nuits à Paris. A la fin de ce voyage, un certain paysan apprit que La France était un pays agricole. Il regretta beaucoup de ne pas avoir eu l'occasion de voir comment travaillaient les paysans français. Ce qui prouve que la France est mal connue au Japon.

En Autriche, Vienne est la capitale de la musique tandis que Rome est la ville de l'art et de l'histoire. Athènes est la ville des mythes. L'Espagne est le pays de la passion et de la guitare. L'Allemagne est le pays des forêts. Pour les touristes japonais, la route romantique est toujours très attirante. Les Japonais ont envie de voir le Château de Neuschwanstein, mais personne ne sait que la route romantique veut dire en fait «la route qui conduit à Rome». Quant à l'Angleterre, elle est connue comme un pays où l'on mange très mal.

Je vais citer maintenant les expressions censées attirer les touristes japonais.

Le titre du catalogue est le suivant : «L'Europe, objet d'aspiration, est désormais proche.»

«Paris, capitale des fleurs où tout le monde désire aller.»

«L'Espagne, où se distinguent les fortes personnalités.»

«La Hollande, pays des tulipes.»

«Le Benelux, où l'on retrouve des quartiers moyen-âgeux, une culture et une histoire diverses.»

«L'Allemagne, avec ses quartiers datant du moyen âge, ses anciens châteaux, ses vastes forêts et ses riches fleuves.»

«L'Italie, pays de la passion, où l'on retrouve à la fois, à Rome, l'époque ancienne, le moyen âge et les temps modernes.»

«La Suisse, à la nature splendide.»

«La Grèce, pays des sites archéologiques, le bleu profond de la mer Egée.»

«Vienne, capitale de la musique, qui brille toujours la splendeur des Habsbourg. Le Tyrol naïf. Les Alpes.»

«L'Espagne de la passion et l'Italie du soleil.»

«L'Allemagne, pays du Romantisme. La route romantique.»

«L'esprit de Paris.»

«L'Italie joyeuse.»

(D'après le catalogue de JTB, 1994)

Les Espagnols

Un professeur d'espagnol écrit : «Les Japonais ne pensaient pas que l'Espagne

faisait partie des pays européens. Chaque fois qu'un Espagnol résidant au Japon entend le mot «Espagne, pays de la passion», il est fou de rage. Il est trop simple de classer l'Espagne dans la catégorie de la passion, du flamenco, des courses de taureaux, et de la sieste. Aucun peuple n'est plus victime des stéréotypes que les Espagnols» (Arimoto Noriaki, *Espagne*, 1983, p. 16).

Même Nitobe Inazo, philosophe de l'époque de Meiji, disait que l'Espagne était un des pays représentatifs de l'Europe et que les Espagnols étaient un peuple à la fois chrétien et barbare. «On a l'impression que les Espagnols sont à la fois civilisés et barbares, gais et tristes» (*ibid.*). «En comparaison des Français, qui ont tendance à éviter les choses extrêmes et radicales, les Espagnols ont tendance à aller trop loin» (*ibid.*). Mais on dit souvent que «les Espagnols sont très affables. Ils n'hésitent pas à parler aux étrangers, comme nous, les Japonais» (*La Vraie Europe*, Takeuchi Shigeaki).

Les Italiens

En ce qui concerne l'Italie, un ancien ambassadeur japonais en Italie écrit ceci : «L'image de l'Italie au Japon, est l'image du pays de l'art et de la culture, du tourisme et de la mode. Et en même temps, c'est celle d'un pays d'instabilité politique, de crise économique, d'angoisse sociale. Ce n'est pas tout à fait faux, mais on ne peut pas dire non plus que ce soit exact» (*L'Italie, pays de merveille*, 1985). Il déclare qu'«en Italie, même si le cabinet tombe, que les finances de l'Etat ne sont pas bonnes, que les crimes augmentent, le peuple vit pleinement sa vie en mangeant bien et en buvant du bon vin sous le soleil <o sole mio>». Mais on sait qu'il y a une certaine différence entre les gens du nord et ceux du sud. On dit aussi qu'il n'y a pas d'Italiens type en Italie, mais plusieurs sortes d'Italiens, le «campanilismo» (régionalisme), comme les Milanais et les Vénitiens par exemple. Les gens sont très attachés à leur région. «Les Italiens du nord sont grands, ils ont les yeux verts, mais ceux du sud sont plutôt petits, ils ont les yeux noirs ou bruns» (p. 2). Cet ambassadeur insiste sur le fait que les trois pays qui produisent les plus belles femmes, sont la Pologne, l'Espagne et l'Italie. En Italie, les arts naissent, mais pas la philosophie, parce que les Italiens aiment vivre sans trop réfléchir. D'autre part les Italiens respectent l'Histoire. Ils sont donc conservateurs et respectueux des valeurs familiales. L'ambassadeur japonais constate que les Italiens ne travaillent pas beaucoup, qu'ils ne respectent pas l'heure des rendez-vous, qu'il y a beaucoup de voleurs et de mafiosi, et que le sexisme règne

encore. Un autre ambassadeur japonais en Allemagne dit qu'il n'y a pas d'Europe sans Italie. «Les Allemands comme Goethe ont une attirance pour l'Italie où les gens sont affables et où l'on peut vivre humainement» (Oshio, p. 278).

Les Allemands

Les Allemands sont réputés aussi travailleurs que les Japonais. Mais Oshio Takashi dit : «Les Européens travaillent pour vivre et les Japonais vivent pour travailler» (*Les villes allemandes et la culture pour vivre*, 1993, p. 48). Pour les caractériser les Allemands, on peut citer «l'économie, la propreté, et la fidélité comme vertus, mais on peut dire aussi que les Allemands sont têtus, peu dociles, et raisonneurs» (p. 67). En comparaison des Japonais qui disent sans arrêt «pardon», les Allemands ne s'excusent presque jamais. D'autre part les commerçants et les techniciens sont très arrogants vis-à-vis des clients.

Lorsqu'on compare la durée de travail annuel, les Japonais travaillent plus de 2100 heures, les Américains 1800 heures, les Allemands 1500 heures. Les Allemands travaillent moins, mais la productivité en Allemagne est considérable. Car les Allemands concentrent à plein leurs forces sur le travail. «Le mot < systématique > existe pour les Allemands» (p. 76). «En Allemagne, la maison est propre, ordonnée et belle». (*L'Allemagne*, Ikeuchi Osamu, 1993, p. 12). L'Allemagne et les Allemands nous donnent une impression de sérieux et de pesanteur. Le Japon moderne respecte l'Allemagne en tant que son ancien professeur. En effet, aujourd'hui encore les professeurs d'allemand sont plus nombreux que les professeurs de français dans les universités d'Etat. Bien sûr les plus nombreux sont les professeurs d'anglais.

Un romaniste japonais écrivit un mémoire sur les gens de l'Europe de l'est. Il y dit que les Tchèques sont toujours pressés mais que les Hongrois vivent sans souci. Dans ce livre, j'ai lu une phrase assez drôle. «Personne ne voyage d'un air plus ennuyé que les Allemands» (Ebisaka Takeshi, *Le voyage de Paris*, p. 20).

Les Anglais

Tournons une page d'un livre sur l'Angleterre. Je dois avouer que pour la plupart des Japonais, il n'y a pas de distinction entre l'Angleterre et l'Ecosse. En japonais, on dit en général «Igirisu» depuis l'époque de Meiji. Récemment un guide touristique remarque la différence des deux pays. J'y ai trouvé la phrase suivante : «Si vous allez en Ecosse, ne prononcez pas sans réfléchir les mots

〈anglais〉 ou 〈Angleterre〉》 (*L'Angleterre*, p. 13). On y trouve même une expression qui distingue les deux pays : «La belle campagne verte de l'Angleterre et l'Ecosse, voyage de dix jours.» (*Asahi Ryokou*) Ce qui est intéressant pour nous, c'est que l'accent de cette publicité est mis sur la belle nature de l'Angleterre.

On dit souvent que les Anglais aiment les choses anciennes et l'humour, que l'Angleterre est un pays de «gentleman» et «un ancien empire malade». Les relations de la famille impériale japonaise avec l'Angleterre, la famille royale britannique, les Beatles et Madame Thatcher représentent l'Angleterre au Japon. On apprend que les Anglais ont contribué à la modernisation du Japon. Mais on l'oublie tout de suite. En 1874, il y avait 503 étrangers employés par le gouvernement de l'époque dont 269 Anglais, 130 Français. Et la plupart des Anglais étaient ingénieurs. Cela montre la puissance de l'Angleterre qui était «l'usine du monde». Cette image subsiste encore maintenant. Un sociologue dit que tous les travailleurs sont de vrais professionnels en Angleterre (*La vraie Europe*, Kato Hidetoshi, 1978).

Les Français

Il faut enfin parler de la France et des Français. «Quand on cite la France, il s'agit toujours de la France en tant que pays de la culture. On y retrouve un sentiment d'envie des Japonais qui n'ont pas les mêmes musées et ni les mêmes paysages des villes» (Un document publié par l'Ambassade de France au Japon. L'auteur est japonais).

Pour les jeunes Japonaises, la France c'est le pays des merveilles. Beaucoup de magazines destinés aux jeunes filles portent des noms français, «Marie Claire», «Elle», «25 ans», «Le Figaro» par exemple (On les trouve dans Le Louvre). Un seul magazine porte un nom allemand : «Spur». Quand le tirage diminue, on fait toujours un numéro spécial sur Paris et sur les Parisiennes pour relancer la vente. En effet, le magazine «Marie Claire» consacré aux quartiers de Paris s'est vendu en une petite semaine. Aux cafés, aux établissements où se déroulent les mariages, aux appartements, par exemple, on donne souvent un nom français. La langue française a quelque chose de magique pour les Japonais. On trouve beaucoup de cafés qui s'appellent «Renoir» ou «La vie en rose», des appartements qui s'appellent «Palais», «Château», «Manoir», «Chambord» par exemple. Quelquefois on donne le nom de «Casa» en espagnol. Quant aux produits

matériels, par exemple aux voitures, on donne des noms anglais comme «Crown», «Blue Bird». Ce phénomène remonte à Arai Hakuseki, philosophe de l'époque d'Edo. Arai Hakuseki transcrivit tous les mots étrangers en caractères Katakana (qui transcrivent la prononciation des mots étrangers) dans son livre *Situations de l'Europe* en 1715.

Dans une publicité pour une société de vente par correspondance, on entend «Cécile, il (*sic.*) offre sa confiance et son amour». Même si c'est ridicule, que la publicité soit mensongère, et que les Japonais n'en comprennent pas le sens, cela n'a pas d'importance. Ce qui compte, c'est que la langue française donne aux Japonaises l'illusion d'une qualité de vie de haut niveau. Les Parisiennes sont toujours bien habillées, raffinées, blondes et sûres d'elles. Mes étudiantes ont envie de visiter Paris au moins une fois dans leur vie, non seulement pour voir les monuments historiques, mais aussi pour retrouver les jeunes filles qu'elles ont déjà vues dans les magazines, mais c'est peine perdue. . .

Si j'écoutais les romanistes, l'image des Français est différente de celle qui est répandue par les magazines. Un professeur m'a dit que les Français sont toujours le contraire de ceux à quoi je m'attendais. Leurs couleurs d'yeux et de cheveux varient. Ils sont tous dissemblables.

Kuwabara Takeo, l'un des dirigeants des études sur La France depuis les années 50, osa dire, à l'époque du développement économique, que la France ne pouvait plus rivaliser avec le Japon, au moins au niveau de la classe ouvrière (*La vraie Europe*, 1978). Il n'a pas, lui, d'illusions sur les Français, à la différence des jeunes filles.

Dans un manuel scolaire de littérature française, on dit que les Français respectent leur langue et s'intéressent beaucoup aux problèmes qui concernent l'être humain, la société. «La caractéristique de la littérature française consiste à chercher les hommes pour les hommes» (*Guide de la littérature française*, éditions Iwanami). L'auteur de ce petit livre ajoute que les Français sont en général sociables et sociaux comparés aux Anglais.

Un de mes professeurs, Kobayashi Yoshihiko dit que les Français sont très méfiants. Ce point de vue n'est pas très répandu au Japon. Mais quand on loue des vidéocassettes en France, on doit payer une caution très chère. Cela prouve que les Français n'ont pas confiance aux clients. Au Japon, avec 300 yen, on peut louer une vidéocassette. Je crois que Kobayashi a raison, car les Français ne croient pas naïvement les autres et veulent juger les choses de leurs propres yeux.

Beaucoup de touristes japonais se plaignent que les Français ne parlent pas anglais même s'ils sont capables de le parler. Certains disent que les Français respectent leur langue, et d'autres disent que les Français ne sont pas aimables.

Au Japon, les lycéens portent un uniforme. Malgré beaucoup de critiques, personne ne pense à abolir ce règlement. Car porter un uniforme signifie être intégré complètement dans un groupe. Dans une entreprise, les salariés travaillent dans la même grande pièce que leur supérieur. Par contre les Français travaillent dans un bureau individuel. Les Japonais ont très peur d'être exclus du groupe dont ils font partie. Les Français sont beaucoup plus indépendants et individualistes. On peut dire que les Français sont contestataires. En somme, chacun a son avis propre en France. Les Français n'hésitent pas à dire ce qu'ils pensent. Les Japonais ne se prononcent pas clairement en pensant à la réaction des autres. Les Français considèrent leur vie de famille plus importante que leur travail auquel les Japonais se consacrent entièrement. Mais on pourrait dire que les Français sont paresseux.

Conclusion

Pour conclure, je veux répéter ce que d'autres ont déjà dit avant moi. Les Européens vivent pour profiter pleinement de leur vie, mais les Japonais vivent toujours pour travailler même s'ils doivent sacrifier leur vie familiale.

Je désire parler de l'internationalisation du Japon qui va bien au-delà du problème économique de l'ouverture du marché japonais. La nouvelle interprétation du conte ultra traditionnel de *Momotaro* citée ci-dessus est intéressante pour comprendre l'attitude des Japonais vis-à-vis des étrangers en général et de "l'internationalisation" du Japon en particulier. En effet, le Japon est aujourd'hui à l'heure de l'"internationalisation", vocable maintes fois répété et sous lequel perç la dure réalité : le Japon se veut international, de nombreuses universités créent des "facultés d'Etudes Internationales", on polémique sur l'emploi ou non des étrangers dans les lycées à rang égal avec les Japonais (le nombre de jeunes enseignants américains — statut de lecteur — a augmenté au niveau du lycée et il existe des lycées spécialisés dans les langues étrangères, surtout l'anglais), sur les routes, dans le métro, les gares, un peu partout, des panneaux de signalisation portent, à côté du japonais, la transcription alphabétique. L'étranger est devenu une véritable mode, une épidémie s'attaquant à tous les niveaux de la

société, du dessin animé aux programmes télévisés pour adultes qui tous, se montrent fascinés par les fastes de l'étranger et des étrangers.

La publicité télévisée est littéralement envahie par les étrangers, connus ou inconnus, qui vantent dans leur propre langue, à la syntaxe bien souvent japonisée, et sans traduction, les mérites de produits allant du whiskey aux voitures en passant par le riz, nourriture pourtant typiquement japonaise s'il en est ! Dans les catalogues de vente de vêtements par correspondance, il n'y a pas un seul visage asiatique mais uniquement des Européens, blonds aux yeux bleus de préférence. En effet, pour les Japonais, l'étranger se résume à l'Amérique, aux Américains et à l'américain. Bien loin derrière, on trouve l'Europe, limitée en général à la France, l'Angleterre, l'Allemagne, l'Italie, la Grèce et l'Espagne. Ne parlons pas des pays d'Asie voisins du Japon qui peuvent être que pourvoyeurs de travailleurs immigrés clandestins ou de prostituées contrôlées par la mafia locale, les "yakuza".

Dans la publicité à la télévision et dans les magazines féminins, on voit très souvent des étrangers. Les étrangers sont pourtant limités aux Européens, aux Américains et aux Chinois. Quand on parle des étrangers au Japon, c'est presque toujours de la race blanche qu'il s'agit, et pas des asiatiques. Et l'on confond toujours les Européens et les Américains. La plupart des Japonais ne distinguent pas les Américains des Européens. Dès que les enfants rencontrent un Européen, ils disent immédiatement «Hello !». Au Japon, des acteurs célèbres, des chanteurs et des sportifs jouent un rôle important dans la publicité. Alain Delon est toujours le représentant des Français. Si des acteurs célèbres font de la publicité pour des vêtements, cela donne tout de suite une plus value aux produits vantés. Pour la publicité de Nescafé, il y a au moins trois versions différentes. Mais il y a toujours une version dans laquelle on trouve une Parisienne.

Dans la rue, on se heurte quotidiennement aux langues étrangères dont les magasins, qu'ils soient boutiques de mode, boulangeries ou salons de thé/restaurants, usent et abusent au mépris le plus total de la syntaxe, de l'orthographe et même du sens qui, bien souvent échappe totalement au "native speaker". Il en va de même pour les vêtements ou autres accessoires de mode qui aiment s'orner de "yoko moji" ("écriture horizontale" qui signifie alphabet), tout aussi sibyllins que dans les cas précédents.

Mais le Japon a peur de tout ce qui lui est étranger. Il est fasciné par l'Occident mais cette fascination est mêlée d'effroi envers quelque chose qu'il ne

comprend pas toujours très bien mais voudrait tout de même imiter. Tout en affirmant avec force l'originalité profonde de son peuple par rapport au reste du monde, le Japon se veut Occidental (au cours d'une émission télévisée récente, les Japonais interrogés dans la rue le concept du mot "Asie" ont tous déclaré qu'ils ne se considéraient pas comme Asiatiques mais plutôt comme Occidentaux). Le Japon a "le complexe de l'Occident" et un rapport que l'on pourrait qualifier "d'amour/ haine" vis-à-vis de l'Occident et des Occidentaux.

On voit donc par là même que l'important pour les Japonais n'est pas l'étranger tel qu'il est, mais l'image qu'ils se font de l'étranger, de la langue étrangère et des étrangers. L'internationalisation n'est qu'un prétexte pour assimiler des cultures, des modes de vie et des bribes de langue, fascinants et effrayants à la fois.

Il existe cependant un revers à cette médaille peu reluisante de ségrégation raciale et de snobisme le plus sot. La nécessité de s'ouvrir sur l'étranger a permis, au niveau des médias, le développement du système de télévision par satellite qui offre, presque en direct, des informations du monde entier. Le nombre de maisons équipées d'antennes paraboliques ne cesse d'augmenter et l'on peut maintenant regarder le journal de France 2 dans les coins les plus reculés de l'Archipel.

Il est à espérer que cette invasion pacifique des télévisions du monde entier va transformer la perception que le Japonais moyen a de l'étranger. Actuellement, seule une petite minorité d'intellectuels parle une langue étrangère. Mais bientôt peut-être, le savoir ne sera plus le privilège des seuls intellectuels.

En tout cas, les Japonais assimilent les côtés les meilleurs des stéréotypes des Européens soit pour le développement de la société soit pour l'autocritique. La meilleure référence pour les Japonais est toujours l'Europe. (octobre 1994)

Bibliographie

- Arai, Hakuseki : *Situations de l'Europe* (Seiyo kibun, 1715), éditions Iwanami.
Arimoto, Noriaki : *Espagne* (Supein), NHK books, 1983.
Braudel, Fernand : *Grammaire des Civilisations*, Champs/Flammarion, 1993.
Ebisaka, Takeshi : *Le voyage de Paris* (Paris kara no tabi), Chou-Koron-sha, 1992.
Frois, Luis : *La culture européenne et la culture japonaise* (Yoroppa bunka to nihon bunka), éditions Iwanami, 1991.
Hori, Shinsuke : *L'Italie, pays de merveille* (Fusigi no kuni Italia), Simul, 1985.
Horigome, Yozo : *Qu'est-ce que l'Europe* (Yoroppa toha nanika ?), éditions Iwanami, 1967.

- Ikeuchi, Osamu : *L'Allemagne* (Doitsu), Shincho-sha, 1993.
JTB : *Le catalogue de JTB*, 1994.
- Kato, Hidetoshi : *La vraie Europe* (Sugao no Yoroppa), Asahi-shinbun-sha, 1978.
- Keene, Donald (entretien avec Shiba Ryotaro) : *Les Japonais et la culture japonaise* (Nihonjin to Nihon bunka), Chuo-Koron-sha, 1972.
- Kobayashi, Yoshihiko : *Etudes françaises* (Fransu gaku nyumon), Hakusui-sha, 1991.
- Koike, Shigeru : *L'Angleterre* (Igirisu), Shincho-sha, 1992.
- Kuwabara, Takeo : *La vraie Europe* (Sugao no Yoroppa), Asahi-shinbun-sha, 1978.
- Oshio, Takashi : *Les villes allemandes et la culture pour vivre* (Doitsu no toshi to seikatsu bunka), Kodan-sha, 1993.
- Shiba, Ryotaro : voir Keene.
- Takeuchi, Shigeaki : *La vraie Europe* (Sugao no Yoroppa), Asahi-Shinbun-sha, 1978.
- Watanabe, Kazuo et Suzuki, Rikie : *Guide de la littérature française* (Furansu bungaku annai), éditions Iwanami, 1990.

(1994年10月26日 ヨーロッパ研究センター月例研究会にて発表)

ドイツの観点から見た 20 世紀初期の日米対立

リチャード・ジッブル

I. 19 世紀末～20 世紀初頭の国際情勢

太平洋地域における日米対立は 20 世紀の国際関係の中で一つの大きな問題である。この対立は 1930 年代に深刻化し、1940 年代になると戦争にまで発展してしまった。対立点は日本と米国が 20 世紀の始め頃から太平洋地域へそれぞれの影響力と勢力範囲を及ぼそうとしたことにあった。しかし、この利害衝突は同時に国際的な問題でもあった。この報告では、20 世紀初期の日米対立問題をヨーロッパの観点、とくにドイツの観点から考えたいと思う。そこで、33 年間に渡りドイツの日本・中国駐在外交官として活躍していたマックス・フォン・ブランド [Max v. Brandt(1835-1920)] の著述を中心に話を進めていきたい。

ブランドの東アジアでの外交活動は、1859 年から 1861 年にかけて、中国、日本、及びタイとの通商契約の締結を委任されたプロイセンの極東探検隊に加わったことから始まった。1861 年から 1875 年までは日本駐在プロイセンおよびドイツ領事・公使として、また 1875 年から 1893 年までは中国駐在ドイツ帝国公使として活躍していた。1893 年に結婚のため退職してドイツに帰ったが、20 世紀初期までドイツ外務省の顧問として、東アジアに関する問題について様々な助言と忠告を与えた。特に 1894 年から 1895 年までの日清戦争の際、ドイツの三国干渉への参加を積極的に勧めた。また、1897 年のドイツ人宣教師殺害事件では、ドイツの軍事介入、鉱山・鉄道の特権、学校創立等ドイツの文化的活動を勧め、中国人の知人との関係を通して、海軍・商業基地の租借、鉄道や鉱山業の特権についての交渉を助けた。さらにまた、1900 年の義和団事件の時には、宣教師問題、賠償問題で意見を求められ、忠告した。

東アジアからドイツへ帰ってきたブランドは、雑誌・新聞記事の著作活動を始め、1914 年までに、中国・日本・アジア・世界の情勢について単行本 20 冊、雑誌・新聞の記事 175 件を書き記した。その主なテーマは日清戦争、膠州湾租借、議和団事件、宣教師問題、中国の歴史と文化、日本の歴史と文化、ドイツの外交政策・植民地政策、その他の国際関係の問題についてであった。

日米対立の問題についてのブランドの意見を紹介する前に、19 世紀末～20 世紀初頭

の国際情勢を簡単に説明したい。次に、19世紀末、日清戦争のあとの日本の興隆、米西戦争の後の米国の興隆とそこから生じた国際情勢への影響についてのブランドの見解を紹介する。最後に、太平洋地域の覇権をめぐる日米対立とその国際的な意味についてのブランドの考え方について述べることにする。

1870年代から1914年の第一次世界大戦までの時代はよく「帝国主義時代」といわれる。この時代の国際関係は、W. ランガーに言わせれば、「帝国主義の外交」(“The Diplomacy of Imperialism”)に特徴づけられている¹⁾。即ち、当時の列強は国際勢力の均衡の枠内で各国の利益範囲を相互に認めながら、自国の立場の強化を図り、世界レベルの政策を立てたが、そこでは、ヨーロッパ内の政策とヨーロッパの外での政策は深く結びつけられて、互いに影響し合うという傾向が顕著だった。この世界レベルの国際関係内での利害衝突はアフリカ、東地中海・中近東、東アジアに集中していた。

19世紀の帝国主義の大きな動機の一つとしてあげられるのは、経済的な問題である。産業革命の目覚ましい発展、技術の向上や新しいエネルギー源の使用によって生産性がますます向上すると、供給が需要を上回り、過剰生産の問題が発生してきた。この問題の解決策として、海外に産業製品の販路、資本の投資先を求めるようになった。それに伴い海外活動を支えるための植民地獲得と海軍の建設も重要な課題となったのである。

ヨーロッパ人の注意は、人口が多く、工業やインフラストラクチャーが未開発のままであり、投資収益が高いと考えられていた東アジア、特に中国に向けられていた。日本も最初のうちは、ヨーロッパの産業の販路や投資先であったが、産業化が早いペースで進むようになると、かえってヨーロッパ列強の競争相手となった。

ドイツとしては、当初特定の対東アジア政策はなかった。ビスマルクの時代(1871-1890年)には、ドイツの国家統一という問題もあって、海外進出は遅れていた。ビスマルク自身にとっては最優先課題はヨーロッパにおけるドイツの地位を維持することであったから、ヨーロッパ諸国との勢力均衡を保ちながらドイツの勢力拡張を図った。植民地獲得を巡る闘争は勢力均衡を破る可能性が多いから、植民地獲得には消極的であった。ヨーロッパの地図を指して、「これが私のアフリカだ」という有名な発言もあるように、ビスマルクは海外進出よりもヨーロッパの問題を優先的に考えていたのである。対東アジア政策では、列強との関係を脅かすような政策を避けて、ヨーロッパ列強が中国や日本に対して強いた「不平等条約」の枠内で、他の国と同等の権利を主張しながら、ドイツの商業的・経済的利益のみを図るのがビスマルクの基本方針であった。しかし、日本よりも中国の方が貿易相手として意味があったから、中国に重点が置かれていた。

ヴィルヘルムII世の時代(1890-1918)になると、「新航路」、「世界政策」という、より積極的な政策が採られ、海外貿易、植民地獲得に関心が高まってきた。同時に、

貿易活動と植民地を守るため、そしてまたドイツの名誉と威信の高揚のため、海軍増強政策を採ることになった。東アジアでは、特に中国が重要視されたのだが、契約制度上の権利の擁護と拡大、海軍・商業基地、鉄道建設に関する特権を求めながら文化活動を促進し、ドイツの影響力を増やすことをねらっていたのである。

しかし、政治的な面では対東アジア政策は同時にヨーロッパ諸国の関係と深く関わっていたことを忘れてはいけない。ヨーロッパの国々の間の問題の一つは、中近東におけるロシアとドイツの対立だったが、ヴィルヘルム2世はビスマルクの平和維持政策、勢力均衡維持政策を捨て、1890年にロシアとの再保障条約の更新を拒絶した。彼は自分の手腕に自信を持っていたのだが、実際には外交が下手であり、ドイツの地位を強化するどころかドイツの国際的孤立、反ドイツ同盟の成立をもたらしたのである。1895年の日清戦争への三国干渉にドイツが参加した一つの理由は、1891年に成立した仏露同盟をよわめ、ロシアの注意をアジアに逸らすためであった。1902年に英国とフランスはアフリカでの利害衝突の問題を整理し、それぞれの勢力範囲を認めて英仏協商を結び、更に1907年に英国とロシアが中近東での利害衝突を緩和するために英露協商を締結したので、反ドイツ同盟がより固くなった。ヴィルヘルム2世は、日本、イギリス、ロシア、フランスが、東アジアにおける利益と勢力範囲を互いに認めたという情勢をみて、ヨーロッパ列強と日本による中国領の分割を防ぐと同時に、ドイツのヨーロッパでの地位を強化するために、1907年から1908年まで、中・米・独の同盟を試みたが、これは失敗に終わった²⁾。

II. Brandt の観点から見た日米対立

A. 列強の勢力均衡を破る日本の興隆と勢力拡張

ブランドの著述を一見すれば、彼の反日的態度は明白である。彼は著作や新聞・雑誌記事の中で、中国の文化と歴史を尊敬し、国際問題における中国の立場に理解を示しているのに対して、日本人については好戦的な性格と勢力拡張の危険性を強調した。昔から朝鮮半島の覇権を狙っていることを指摘し、日本が台湾・琉球諸島を獲得したことを厳しく批判した。日本が中国で勢力範囲を拡張することによって、東アジアの勢力の均衡が破られ、経済競争が激しくなり戦争の原因となるだろう、と彼は何回も注意を呼びかけていた。

日清戦争の時、ブランドは外務省の顧問として日本の勢力拡張や中国における日本の経済的支配、中国領土の分割を防ぐため、またロシアの注意をヨーロッパからアジアへ逸らすため、更には中国を支持することの代償として海軍・商業基地も獲得できるという理由から、三国干渉へのドイツの参加を勧めた³⁾。ブランドはまた、1894年から1900年代までの記事や著作の中で、日本の勢力拡張、経済発展をヨーロッパに対す

る脅威として強調した。彼の分析では主に3つの主張がなされている。第一に、日本人は本来、好戦的な民族であって、秀吉の時代からずっと朝鮮半島の覇権を狙っていたということである⁴⁾。第二に、日本政府は戦争を通して、国内問題から国民の注目を逸らそうとしているということである。特に、侍の不満の問題が深刻であって、国粋主義者、新聞の扇情主義的報道が戦争を望んでいた事を批判した⁵⁾。そして、第三には、経済的な問題である。プラントは日本の勝利が中国政府の保守派の勢威を破って、中国の改革と経済発展への道を開くという一般に流行っていた考え方を論駁しようとした。プラントによると、経済的に発展している国は消費者の購買力が高いので、より良い貿易相手になるのが普通だが、日本の場合はそうではない。ヨーロッパの国よりも労働力、輸送料が安いからヨーロッパ諸国が競争できないぐらい安い価格で製品を提供できる。また、日本は外国の金融資本を受け入れない。日本はヨーロッパの商品の商標の権利を侵害しているし、中国は日本の真似をするだろうから、問題がますます悪化する一方である。最終的には、日本の優位が確立すると中国（朝鮮、満州を含む）の市場を独占し、ヨーロッパの諸国は締め出されてしまうに違いない。特に、石炭業、鋼鉄製品、木綿織物の市場から締め出されるだろう。結局、最初に投資をした金融資本家、産業資本家は儲かるかも知れないが、中国が日本の指導のもとに工業化するとヨーロッパの産業製品を締め出すので、ヨーロッパの諸国は損することになるだろうとプラントは主張した⁶⁾。

ところで、三国干渉への参加の代償として、ロシアはシベリア鉄道が満州の領土を通ることに中国の同意を得て、それに伴う管理権、経済上の特権も獲得することができ、フランスは南西中国において経済上の特権を獲得したが、ドイツは何の代償も得られなかったことは確かである。しかし、ドイツは1897年から1898年までドイツ人の宣教師の殺害事件を契機に青島（チンタオ）を占領して、膠州湾租借を中国政府に認めさせることに成功した。商業・海軍基地、鉱山・鉄道の特権を獲得したわけであるが、このドイツの動きを見て、同じ1898年にロシアは遼東半島を占領して、鉄道建設の権利、海軍基地を獲得した。同様に英国は威海衛（ウェイ・ハイ・ウェイ=いかいえい）を占領、租借地とした。また、中国の分割を恐れていた米国は、1900年に「門戸開放政策」で中国におけるすべての国の同等の権利を主張し、英国、ドイツ、ロシア、フランス、日本、イタリアの同意を得たと発表した。しかし、列強は依然としてそれぞれの勢力範囲を守ろうとしたから、実際にはあまり意味がなかったのである。

そこでは、特にロシアの勢力範囲拡張の試みが目立つ。1900年の義和団事件で、外国人追放運動が盛んになったが、騒動を押さえ外国人の命と財産を守るために、ヨーロッパ列強と日本は中国へ軍隊を派遣した。ロシアはシベリアに軍隊を派遣し、後で撤退すると約束したが、撤退しようとはしなかった。ロシアの進出を恐れた英国と日本は、対策として1902年に日英同盟を締結した。これは、それぞれの勢力範囲を認め

て、戦争の際に中立を守ることを約束した防衛的同盟であった。満州からのロシア軍の撤退の遅れ、ロシアの朝鮮半島への進出などで、日本とロシアとの関係が悪化して、朝鮮半島や満州でそれぞれの勢力範囲を決めるために交渉が行われたが、話し合いが行き詰まって戦争となった。

ロシアの侵略的政策は実際に東アジアにおける勢力均衡を破るものだったが、ブラントの考えでは、悪かったのはロシアではなく、日本の方であった。ブラントの反日的態度は日露戦争に関する記事の中で特に目立つ。たとえば、1902年の記事の中で、朝鮮半島の覇権問題を巡ってロシアと日本との間に戦争が起こるだろうと予告し⁷⁾、1903年の記事のなかで、日本の陸軍、海軍、議会、新聞などは朝鮮半島の支配権を獲得するためにロシアとの戦争を準備していると書いた⁸⁾。

また、日露戦争の開戦のあとに書いた記事の中で、ロシアが戦争の準備をしていないのに日本が積極的に戦争準備をし、宣戦の布告なしに戦争を始めたと厳しく批判した⁹⁾。さらにその他の記事の中で、日本の勝利は朝鮮半島、満州の文化的発展のためにはならないと指摘したが、それは、日本人が伝統的な文化を捨て、西洋文化を導入はしたが、道徳的にだめになっているからだというのだった¹⁰⁾。

日露戦争は、米国大統領ルーズベルトの仲介で終戦となったが、日本の国民の中には平和条約の条件に対して不満を持っていた人が少なくなかった。これを知ったブラントは、日本は好戦的でナショナリスティックな軍隊や急進的政党、賃金労働者などの不満を外へ逸らすために、また戦争をするだろうと非常に悲観的に見ていた。また、日本の中国への影響力がますます大きくなると勢力均衡にとって大変危険であるとも述べた。日本は中国へ教師、商人、新聞記者、仏教の布教僧などを送り、中国は日本へ留学生を送るが、これは中国の発展のためになるどころか、見せかけの西洋文化を導入した日本から悪影響を受けるだけだとブラントは批判した。日本は中国を本当に助ける意志はなくて、ただ商業、貿易、工業の特権を求めているだけだというのである¹¹⁾。

要するに、日清戦争、日露戦争での日本の勝利は、勢力均衡を崩して、国際関係上では非常に大きな影響を及ぼしたわけである。19世紀末、米西戦争の結果、アメリカ合衆国も帝国主義の一途を辿り始めフィリピン、ハワイを獲得、海軍増強政策を取ることになると、東アジア・太平洋地域の勢力均衡がさらに破れるとブラントは見ていた。

B. 米国の興隆と勢力拡張

ブラントは1898年に、米国の帝国主義的動きの始まりとなった米西戦争について3つの記事を記した。彼の分析では、戦争の要因は特定の外交政策にあったというよりも、国内の状況にあった。具体的に言えば、経済的な問題と国民のプライドの問題だっ

たというわけである。経済的な動機としては、米国人の一部が昔から中南米、キューバへの介入を望んでいたことがある。個人的な企ては幾つかあったが、大半の国民はむしろ無関心であったので、米国政府としては消極的な姿勢をとっていた。しかし19世紀末、キューバに活動拠点をもつアメリカの砂糖大企業が安定した政治体制を望んだため、これが介入の一つの理由になった¹²⁾。

国内状況から発生したもう一つの戦争の要因は、国民のプライドの問題であった。戦艦メーヌの爆発事件は原因が不明であったが、国民の間に、これはスペインの仕業だという確信を持っていた人が多かった。また、駐米スペイン大使が手紙の中で、McKinley 大統領を侮辱したということで、スペインへの不信感と敵対心を引き起こした事件もあったが、ブランドは、アメリカ人は日本人と同様に感情的であると指摘して批判した¹³⁾。

ブランドはその記事の中で、キューバ問題への米国の干渉は国際関係の観点から不当であると述べている。彼はスペインのキューバにおける政策は不相当で残酷であったと認めながら、米国内の特定のグループの反体制派への支持は許せないと批判した¹⁴⁾。そして、米国がスペインにだけ圧力をかけたことは正しくない。これでは、米国は外交の新しい原理を作りだそうとしているかのようだと皮肉って非難した。それは、米国が平和をもたらすために、交戦国両側にはなくて、片方にだけ停戦を要求したからである¹⁵⁾。

さらにブランドは、戦争でキューバの問題が改善するはずはなく、フィリピンも争点になり国際的な問題になるだろうと予告したが、ドイツやヨーロッパ諸国としては中立の立場を守るべきであると主張した。米国は他の国の権利を無視する傾向にあるが、フィリピンの占領政策では他国の権利を尊重すべきである。米国が太平洋で優位を占めると、勢力均衡が破れて、国際情勢がずいぶん変わるからである¹⁶⁾。特に、フィリピンの占領政策は大きな問題となるだろうと予告した。米国には先住民の虐待の前歴もあるので、フィリピン人も抑圧されるだろうし、米国の西部では中国人の移民を締め出そうとしているが、中国人をフィリピンから締め出すことはできないからである¹⁷⁾。

一方、ブランドがすべての大国に勢力拡張をする権利があるということを当たり前だと考えていたのもたしかである。米国もドイツも植民地無しには発展しない、と指摘しながら、米国も当時の国際関係体制の枠内で強国となりつつあるが勢力均衡を破らないように発展すべきだと主張したのである¹⁸⁾。

C. 東アジア・太平洋地域の覇権をめぐる日米利害衝突の危険性

ブランドの記事の中に出てくるもう一つのテーマは、当時の国際関係における太平洋地域の重要性というものである。ブランドによると、太平洋地域は日本と米国の勢

力拡張のため、従来より重要な意味を持つようになりつつある。たとえば1900年の新聞記事で、彼はアメリカによるフィリピンやハワイの併合により太平洋が地中海に代わって世界の経済、政治上の意味で重要になったと書いた。そして、この新しい国際情勢の中で次の戦争は貿易戦争の形で現われるから、ドイツの貿易を守るために海軍を増強すべきだと主張した¹⁹⁾。

ブランドが指摘していたように、20世紀になってから日本の地位は確かに強化された。特に、1905年にポーツマスで締結された日露講和条約の規定で、ロシアは朝鮮半島における日本の利権を認め、日本にサハリンの南半分、遼東半島とそれに伴う特権、南満州鉄道を割譲した。また、1905年の日英同盟の更新、1907年の日仏協定と日露協定によって、朝鮮半島、満州における日本の優位が認められた。即ち、米国とドイツ以外の列強が日本の優位を認めたこととなったのである。この日本の進出を防いで中国を支えるために、ドイツ・アメリカ・中国が一時的に接近したが、同盟は成立しなかった。中国は日本を刺激することを懸念し、米国はイギリスとの関係の悪化を懸念していたからである。

同様に、19世紀末の米西戦争のあと、アメリカがフィリピンなどの海外領土を獲得し、太平洋地域への影響力が大きくなった。特に、日露戦争の後に満州における日本の経済的進出、カリフォルニアへの日本人移民問題、海軍増強などの問題で、日米対立がだんだん高まってきた。ブランドは数件の記事でこの日米対立の問題を扱った。たとえば1907年の記事で、世界の最近の動きとして、アメリカによるハワイ・フィリピンの併合、日本の満州・朝鮮半島への進出で、「世界政策」の舞台は西から東つまり太平洋へ移りつつあるとし、この新しい世界体制の中で、将来の戦争は経済的な問題が原因になるだろうと予告した。本来の好戦的性格と相まって、日清戦争と日露戦争での勝利、ヨーロッパ列強との条約締結などで冒険主義になっている日本と、太平洋地域に進出している米国との間の対立がますます激化して、戦争に発展する可能性もあると彼は指摘したのであるが、具体的に、両国の国民はあまりに感情的な性格を持っているから、ハワイやカリフォルニアにおける日本人移民排除主義は戦争のきっかけになるかも知れないとブランドは考えていた²⁰⁾。

移民問題は20世紀初期に実際に深刻な問題となっていた。ブランドが指摘していたように、日本の移民は1870年代からハワイ、カリフォルニアへ大量に流れていたが、中国人と違って土地を買って農家を営む人が多かったから、土地を欲しがる白人の競争相手になったわけである。1905年に日本人を対象とする「アジア人移民排除同盟」[Asian Exclusion League]が創立されると、反アジア人の気運が益々強まり、1906年にはサンフランシスコで日本人と中国人の子供を白人と別の学校で教育することになった。日本では、これを侮辱と受けとめた人も多かったが、日本だけではなく、米国でも戦争屋は騒いでいたのである。

ブランドは1907年の記事の中でこの移民問題を扱ったが、ハワイへの移民の人数を限定する動きがあることと、カリフォルニアで日本人の子供の州立学校入学が認められないことで、日米間の緊張が高まっていると分析していた。この問題が原因となって戦争になるのではないかという声がアメリカ、日本、ヨーロッパの新聞などに現われたけれども、戦争はすぐには起こらないというのがブランドの判断であった。移民問題をめぐるこの日米の緊張は、もっと深いところの利害衝突の先ぶれに過ぎないと彼は見ていたからである。彼によると、日米間の対立は両国が太平洋地域にそれぞれの勢力範囲を伸ばそうとしていることから生じた当然の利害衝突であった。米国はハワイやフィリピンの獲得によって、太平洋地域を支配する使命感に駆られ、一層の進出を企てていた。他方では、日本は昔から好戦的であり、たとえば、台湾、琉球諸島、朝鮮に勢力を伸ばし、中国における領土獲得も求めている。そして最近では日清戦争、日露戦争の勝利から大胆になり、太平洋地域の支配も狙っているのである。要するに、膨張主義的な政策に乗り出している両国間の衝突は結局不可避であるとブランドは考えていた。当分の間は日本の方が優勢であるけれども、パナマ運河が完成すれば、米国は増強された海軍を太平洋にも容易に派遣できるようになるので、最終的には米国が優勢になるだろうとみていたのである²¹⁾。

このようにして、ブランドは日米間の緊張問題を東アジア・太平洋地域の国際情勢の問題を背景として考えていたことがわかる。この太平洋地域の覇権をめぐる日米間の争いでは海軍の存在が不可欠なものとなった。米国では海軍増強政策で1901～1907年における軍艦の造船支出が倍になり、容積トン数が4倍も増えたことは事実である。米海軍の大きさが英国に次いで世界で第二位となったわけである。ブランドは1908年の記事のなかで、この問題に触れた。1907年12月、米艦隊は世界を一周するため大西洋から太平洋へ派遣されたが、このいわゆる“Great White Fleet”の派遣は扇情主義的な新聞で反日的行為として大いに報道された。というのは、ちょうどその時日本海軍の艦隊は日本とフィリピンとの間で演習をしていたので、両国の海軍の衝突となるのではないかと十分に考えられたからである。しかしブランドは、海軍の太平洋派遣は移民などの問題から生じた日米間の対立とあまり関係がなく、むしろ日本に対して中国の門戸開放を擁護し、太平洋における米国の立場を強化するためだと受けとめた。米国が日本に対して侮辱的なことや乱暴なことをして憤慨させないかぎり、移民の問題で戦争は起こらないと主張したのである²²⁾。

日米対立の問題、特に海軍増強の問題がきっかけとなって、ブランドは1908年に雑誌の記事上で、あるフランス人との論争に巻き込まれた。A. ロベーフというフランス人の元海軍士官が、移民の問題が深刻化すると日本艦隊と米国の艦隊との間に戦争が起り、日本艦隊が勝ってフィリピンやハワイを獲得するだろうという内容の記事を書いて話題を呼んでいた。ロベーフは、日本の海軍は米国の海軍よりも乗組員の経

験も深く、よく訓練されているし、日本の戦艦は米国のそれと比べると数が少ないが大きいから、米国海軍に勝つだろうと結論していたわけである²³⁾。ブラントはこの記事の内容を論駁して、米国海軍の劣勢はそれほどのものではないし、移民の問題だけでは戦争にならないと主張した²⁴⁾。これに対して、ロベーフは再び、日本海軍の優位を主張した。即ち、戦艦の大きさ、士官や水平の優れた経験、訓練をさらに強調したわけである。そこでブラントは、1588年のスペインの無敵艦隊の敗北を例証として、大きい戦艦が数多くの小さい戦艦に敗れることもあると論駁した。また、日米間の緊張や対立がいつか戦争につながると認めながら、戦争は移民の問題だけではすぐには起こらないことを強調した。戦争の原因はより深い問題から生じる。即ち、中国の独立主権の問題、中国における門戸開放の問題、太平洋地域の覇権を巡る日米の対立の問題から起こると言うことなのである²⁵⁾。

移民の問題や艦隊の派遣の問題で一時的に日米間の対立は悪化したが、両国の政府は問題解決に努力して、結局緊張はかなり緩和したといえる。1907年の「紳士協定」によりルーズベルト米大統領は、アメリカ本土への日本人移民を許さないことに対してカリフォルニア州政府に圧力をかけ、サンフランシスコの教育委員会は人種差別的な政策を取り消すこととなったのである。翌年の1908年に日本全権公使の高平小五郎と米国国務長官のルートの間に関結された協定（「高平・ルート協定」）も両国間の緊張緩和に役立った。太平洋における両国の勢力の現状維持、中国の門戸開放、独立主権の擁護、太平洋での両国領土の尊重などが認められたが、このようにして、1920年代から日米間の利害衝突が再び深刻になるころまで、日米対立の問題はかなり治まったわけである。

III. 結論

今まで述べたことから、ブラントはその新聞・雑誌記事などで、日本と米国の興隆や日米間の対立の問題を世界レベルの国際関係の枠内で考えていたことがわかる。ブラントは日米間の緊張・対立関係は単なる移民問題や海軍増強の問題から発生したのではなく、東アジア・太平洋における覇権を巡る争いというもっと根本的な問題から発生した、と主張していたわけである。ブラントは1908年の記事の中で日米対立の問題の意味について次のように書き記した。「東アジアの覇権を巡る日本と米国の闘争は20世紀の国際情勢の基調をなすものの一つとなるだろう。」“... der Kampf um die Vorherrschaft in Ostasien zwischen Japan und Amerika wird eins der Ereignisse sein, die dem 20. Jahrhundert seine Signatur verleihen werden²⁶⁾.”

注

- 1) William F. Langer, *The Diplomacy of Imperialism, 1890-1902*, 2nded. (New York : Knopf, 1952).
- 2) Manfred Jonas, *The United States and Germany : A Diplomatic History* (Ithaca, New York and London : Cornell University Press, 1984), 87-91.
- 3) 日清戦争への干渉についてのプラントの意見に関しては、Richard F. Szimpl, "End of the Century Japan through German Eyes : Max von Brandt and Japan, 1894-1914," *German History* 9 (1991) : 310-317 頁を参照せよ。
- 4) Max v. Brandt, "Die koreanische Frage," *Deutsche Rundschau* 80 (September 1894) : 459-462 ; ders., "China, Japan, Korea und die neueste Geschichte Ostasiens," in Arnim Tille (Hg.), *Weltgeschichte*, 2 Aufl., (Leipzig und Wien : Verlag des bibliographischen Instituts, 1913-1922), 1 : 210.
- 5) Max v. Brandt, "Ostasiatische Probleme," *Deutsche Rundschau* 81 (November 1894) : 265-266 ; ders., *Die Zukunft Ostasiens. Ein Beitrag zur Geschichte und zum Verständnis der ostasiatischen Frage* (Stuttgart : Strecker und Moser, 1895), 8-9.
- 6) Max v. Brandt, "Der chinesisch-japanische Conflict," *Deutsche Rundschau* 82 (Februar 1895) : 296-297 ; ders., *Die Zukunft Ostasiens*, 43-44, 46-51 ; ders., *Ostasiatische Fragen. China, Japan, Korea*. Berlin : Gebrüder Paetel, 1897), 275-279.
- 7) Max v. Brandt, "Das moderne Japan," *Die Nation* 20 (14. März 1902) : 372.
- 8) Max v. Brandt, "England, Rußland, und Japan in Ostasien," *Die Nation* 21 (26. Dezember 1903) : 195-196.
- 9) Max v. Brandt, "Der Ursprung des russisch-japanischen Krieges und die Vorbereitungen zu demselben," *Die Umschau* 9 (18. März 1905) : 221-225.
- 10) Max v. Brandt, "Die Kämpfe in Asien, ihre kulturellen und kommerziellen Folgen," *Die Umschau* 8 (10. September 1904) : 723-729.
- 11) Max v. Brandt, "Die Zukunft Ostasiens," *Die Umschau* 9 (16. September 1905) : 743-744.
- 12) Max v. Brandt, "Die Vereinigten Staaten und Spanien," *Deutsche Rundschau* 95 (Juni 1898) : 430-431 ; ders., "Der spanisch-amerikanische Konflikt," *Cosmopolis. Internationale Revue* 10 (Juni 1898) : 839.
- 13) Max v. Brandt, "Cosas d'España," *Deutsche Revue* 23 (Juni 1898) : 257-259.
- 14) 同上、258 ; Max v. Brandt, "Die Vereinigten Staaten und Spanien," 432-433.
- 15) Max v. Brandt, "Der spanisch-amerikanische Konflikt," 840.
- 16) Max v. Brandt, "Cosas d'España," 257-261 ; ders., "Die Vereinigten Staaten und Spanien," 432-433.
- 17) Max v. Brandt, "Ex Oriente Lis," *Deutsche Revue* 24, 1 (März 1899) : 362.
- 18) Max v. Brandt, "Die Annexionen der Vereinigten Staaten," in *Zeitfragen. Die Krisis in Südafrika, China, commerciales und politisches. Kolonialfragen* (Berlin : Gebrüder Patet, 1900) : 330-332.
- 19) Max v. Brandt, "Die Entwicklung der Dinge im fernen Osten," *Münchener Allgemeine Zeitung*, 11. März 1900。この記事は Max v. Brandt, *Zeitfragen*, 371-377 に転載されている。

- 20) Max v. Brandt, "Japan und die Vereinigten Staaten," *Deutsche Rundschau* 133 (Oktober 1907) : 94-104.
- 21) Max v. Brandt, "Der Gegensatz der Japaner und der Nordamerikaner im Stillen Ozean," *Zeitschrift für Sozialwissenschaft* 10 (1907) : 160-164.
- 22) Max v. Brandt, "Der kommende Kampf in Ostasien?" *Deutsche Revue* 33, 1 (März 1908) : 259-260.
- 23) A. Laubeuf, "Die Vereinigten Staaten und Japan," *Deutsche Revue* 33, 1 (März 1908) : 344-356.
- 24) 同上の論文のプラントによる後記。
- 25) Max v. Brandt, "Die Vereinigten Staaten und Japan," *Deutsche Revue* 33, 2 (April 1908) : 123-125.
- 26) Max v. Brandt, "Die Grundlagen der japanischen Kulturentwicklung," *Internationale Wochenschrift für Wissenschaft, Kunst, und Technik* 2 (26. Dezember 1908) : 1651.

(1994年11月30日 ヨーロッパ研究センター月例研究会)

EUにおけるスペイン

——最近の企業法制の動向と一人会社の容認——

黒田清彦

1. 最近の企業法制の動向

スペインにおける会社の経済的形態は様々であるけれども、法的には、我が国におけると同様、合名会社・合資会社・株式会社および有限会社の4種類の基本形態に集約することができる。このうち、商法典に規定されている合名会社および合資会社を除き、株式会社および有限会社については各々独立の単行法が存在している。

株式会社法は、1951年に制定・公布されたものであるが、その10数年後には、改正論議がなされるようになってきた。周知のように、とりわけ商法・企業法の分野は、経済社会の変化を後追いする・企業界の要求に応じていくという側面ないし必然性がある。このことは、最近の日本における相次ぐ商法改正（昭和56年・平成2年・同5年・同6年）を見ても明らかである。スペインでも、株式会社法の制定・公布後の経済状況に対応する必要から改正論議が起こったのであるが、これに加えて、諸外国の改正立法（1965年西ドイツ・1966年フランス）に刺激されたという要因もあった。しかしながら、当時のスペインは、国の内外ともに困難な時期にさしかかっており¹⁾、改正作業（司法省の法典編纂委員会商法部会で原案が作成される）は、なかなか進展しなかった。

株式会社法の改正作業が具体化するのには、フランコ没（1975年）後の諸制度改革の動向においてであった。対外的には、スペインが永年加盟を希求してきたEC（結果的には1986年1月1日より加盟国）における会社法制の統一ないし調和の動き、換言すればEC指令やヨーロッパ会社法案が改正機運の要因として挙げられる。司法省の法典編纂委員会における改正作業は、1979年草案として一応の結実を見るのであるが、その後いくつか状況の変化が生じたため、改正立法は一時頓挫した²⁾。しかし、1985年には、スペインのEC加盟が決定した（6月12日加盟条約調印・7月17日国会批准）ため、司法省は、法典編纂委員会商法部会に対して、国内法を会社に関するEC指令³⁾に適合させる任務を命じた。そこで、同部会は、改正の目的を、①株式会社法に限らない、および②現行EC指令に限るという二つの意味において株式会社法の全面改正という従来の作業方針を変更することにした。もちろん、この新しい方針の下でも、

1979年草案がたたき台になったことは、言うまでもない。以上の経緯を経て1987年6月にできあがった商法部会案が2年間にわたる国会審議の末、1989年7月25日法律第19号「会社についての商事立法の一部改正およびヨーロッパ経済共同体（EEC）指令への適合に関する法律」として成立、株式会社については、この法律に基づき、同年12月22日に国会で可決された立法勅令第1564号「株式会社法の改正法文を承認する立法勅令」が同月27日に公布された⁴⁾。

他方、1953年の有限会社法は、この株式会社法改正に伴い一部改正されたのみであったが、1989年の株式会社法改正の直後にEC理事会で採択された第12指令(89/667)を契機に、これまた大幅な改正作業が開始され、今年3月に新有限会社法(1995年3月23日法律第2号)として成立、同24日に公布され、去る6月1日より施行されている。

新有限会社法は、基本的には①人的要素と物的要素の混合、②本質的な閉鎖性、および③制度としての柔軟性を考慮して、旧法を全面的に見直したものである(立法理由II)。旧法は株式会社法規定の準用に負うところが多く、条文(本文)も32ヶ条であったものが、新法では何と4倍の129ヶ条と整備され、この会社形態を利用しやすくする配慮(同法立法理由IIIの2)が各所に見られる。本日の報告は、新有限会社法における最大のトピックスである一人会社の容認に焦点を当てることにする。

2. 一人会社をめぐる新法以前の状況

スペインでは、会社の種類を問わず、社員が一人となったことを会社の解散原因とする規定が存在しなかったため、社員複数性が復活する可能性を根拠に、会社成立後の一人会社は従来容認されてきた(通説・判例)。しかしながら、設立当初より社員が一人という状況が許されるかについては、議論が分かれていた。設立発起人を3名以上要求する株式会社法の場合は、解釈論として一人会社の設立を認めることは不可能であったが、発起人の員数につき規定のない有限会社では、立法論としても解釈論としても可能であった。他方、1980年のドイツ有限会社法の改正を皮切りに一人有限会社を容認するヨーロッパ諸国の立法は、スペインの学説に影響を与えた。しかし、会社設立は契約であるとする伝統的な考え方も根強く、立法者も一人会社の設立容認にはなかなか踏み切れなかった。ただ、1989年新株式会社法の草案(前述の1987年草案)では、従来唯一の例外とされてきた公権力による一人会社設立⁵⁾の他に、完全子会社設立の便宜のため、株式会社が発起人であれば一人会社の設立を認めることにしていたのであるが、同時に単独株主に無限責任を負わせる規定を設けたことが一部の論者の反発を招いた。すなわち、株主有限責任の原則との矛盾あるいは株主複数性の回復可能性を理由とする反論が強く、この立法者の目論見は実を結ばなかった。他方、一

人会社に関する立法者の沈黙の背景には、スペイン国会における立法作業が行われていた頃、一人会社を容認する EC 第 12 指令の立法作業がたまたま同時併行して進んでいたこともある。立法者としては、その時点では必ずしも明確でないながらも、EC 指令の方向を逸脱することを恐れたのであろう。

3. 一人会社の容認

1989年12月21日——奇しくもスペインの株式会社法および有限会社法の改正法成立の前日——に EC 理事会で採択された一人会社(基本的には有限会社、派生的に株式会社)に関する第 12 指令は、スペインの学者および実務家(弁護士・登記官・公証人)に大きな衝撃を与えた。その丁度 6 ヶ月後(1990年6月21日)に、登記・公証総局(Dirección General de los Registros y del Notariado)は、成立後の会社においてすべて株式が集中した単独株主による定款変更を有効と認め、したがって当初から一人で会社を設立することも認められることを示唆する審決を下した⁶⁾。この審決が、一人会社を容認する立法論に弾みを付けた。その結果、1995年新有限会社法の立法者は、従来ネックとなっていた単独社員の責任につき周到な配慮を施すことにより、会社成立後はもとより成立当初からの一人有限会社を明示的に容認するとともに、株式会社についても一人有限会社に関する規定を準用することとした。EC 第 12 指令が基本的には中小規模の会社を念頭に置いているのに対し、また最近のドイツの立法(1994年のいわゆる小規模株式会社法: Kleine AG Gesetz) が株式会社については規模を制限して——非上場会社・株主が特定できる会社——一人会社を容認しているのに対して、スペイン法は、中小企業者の便宜のみならず、大規模会社による完全子会社の設立の便宜をも念頭に置いているのであり、したがって、有限会社であれ株式会社であれ、一人会社設立について規模の制限は一切設けていない。この点、スペインは、EU 諸国の中で最も進んだ立法をなし遂げたと言える。

まず、新有限会社法は、第 XI 章「一人有限会社(Sociedad unipersonal de responsabilidad limitada)」を特別に設けて、第 125 条から第 129 条の条文を置く。株式会社については、新有限会社法の付則第 2 (Disposición adicional segunda) ——立法形式の点から見ると我々には少々奇異に映るのであるが、これは 25 項目にわたる株式会社法改正規定である——第 23 項が、株式会社法に第 XI 章「一人株式会社(Sociedad anónima unipersonal)」を新設し、第 311 条として「有限会社法第 XI 章の規定は一人株式会社にこれを準用するものとする」という規定を設けることを定めている。

一人会社においては、単独社員(株主)の個人財産と会社財産との混同の危険があるので、スペイン法は、これにより生ずる弊害を避けるべく周到なメカニズムを用意した。実際、一人会社に関する規定は、殆んどすべてがこのための規定である(付記

する条文は注記のない限り 1995 年新有限会社法の規定を指す)。

第一に、一人会社の開示がある。すなわち、会社と取引を行う第三者を保護するために、一方では、①一人会社の設立、②複数社員（株主）の手にあった持分（株式）がすべて単独社員（株主）の所有するところとなったこと、逆に③一部または全部の持分（株式）を譲渡した結果一人会社でなくなったことは、公正証書に記載して商業登記所に登記しなければならず、いずれの場合にも単独社員（株主）の何人であるかを記載することが要求される（126 条 1 項）。他方では、一人会社の状態が続く限り、会社は、そのすべての書類・通信・発注書・納品書および法令または定款の規定によりなすべき公告のすべてに、一人会社であることを表示しなければならない（同条 2 項）。政府草案では、会社の商号にも一人会社であることを表示すべきことを要求していた。しかし、社員（株主）数が単数から複数になる度に、また逆に複数から単数になる度に定款変更の手続きを取らざるを得ないことになるこのような要求は、さすがに国会審議において削除された。それでも、新有限会社法におけるこの開示要求は、商業登記所に登記することを義務付けるのみの EC 第 12 指令第 3 条と比較して、厳格と言える。そのため、学者の中には、一人会社を悪者扱いしているかのように不当であると批判する者も見られる。この開示を行うのは誰であるかについては、EC 第 12 指令同様、規定はないが、取締役が行うと解するのが妥当であろう。但し、登記義務が履行されなかった場合に制裁を受けるのは、単独社員（株主）である。すなわち、会社が一人会社となってから登記がなされないまま 6 ヶ月が経過したときは、単独社員（株主）は、その間に一人会社として締結した債務につき、会社と連帯して人的無限責任を負う（129 条）。

第二に、単独社員（株主）は言わば社員（株主）総会と同じであり、その意思決定は、総会の決議と同様に扱われ、議事録にこれを記載しなければならない（127 条前段）。これは EC 第 12 指令第 4 条第 1 項の規定を採用したものであるが、同条第 2 項が単なる書面記載でもよいとするのと異なり、正規の総会議事録として残す——場合によっては（取締役が要求すれば）公証人の総会出席により公正証書が作成される（株式会社法 114 条）——ことを要求する点、単独社員（株主）の恣意的行動を防止しようとする立法者の意図が表れている。議事録に記載された決定は、単独社員（株主）または取締役によって執行される（127 条後段）。

最後に、単独社員（株主）と会社との間で締結される契約について、EC 第 12 指令第 5 条は、当該の単独社員（株主）が会社を代表する場合にのみ書面契約を義務付け、さらに会社の日常業務の場合にはこれを免除することを認めており、スペインでも、政府草案は、この EC 第 12 指令と同様の内容であった。しかし、国会審議において、これまた第三者保護を強化する規定に修正された。すなわち、①単独社員（株主）と会社との間で締結される契約は、会社の代表者が何人であるかを問わず、通常複数当

事者間で締結される契約の場合にその性質に従い法律が要求する書面または書類形式において (por escrito o en la forma documental) なされることを要し、②当該の契約は、会社の記録簿に転記して、会社の書類に関する規定に従い法的認証を受けなければならない(128条1項1文)。また、③これらの契約は、年度決算の際に、付属明細書において明瞭かつ個別的に言及されることを要する(同項2文)。他方、④単独社員(株主)または会社が支払不能に陥った場合には、a) これらの契約が記録簿に転記されないとき、b) 年度付属明細書に言及されなかったとき、またはc) 年度付属明細書に言及されても商業登記所に寄託(計算書類の寄託義務：株式会社法218条)されなかったときは、単独社員(株主)も会社も、当該契約の成立を第三者に対抗することができない(128条2項)。さらに、⑤当該契約の締結の日より起算して2年の間、単独社員(株主)は、当該契約の結果会社の損失において直接または間接に取得した利益につき、会社に対して損害賠償の責任を負うのである(同条3項)。

このように、スペイン法は、成立後の一人会社であれ設立当初からの一人会社であれ、その存在を野放しにしているのではない。平成2年の我が国商法改正において一人会社が無制限に——最低資本金制度によるバリエーションは別として——認められたのと異なり、単独社員(株主)の責任を始めとするきめ細かい第三者保護の規定を設けて、一人会社によって生ずる弊害を最小限に食い止める努力を払っている点は、大いに注目し得る。

註

- 1) 特に1967~1968年頃から、国内ではマテサ事件という政・財界の癒着が暴露された戦後最大のスキャンダル事件、非合法組織ETAのメンバーに対する不当な裁判(不十分な審理に基づく死刑判決、これに抗議してパチカンを始め多くの国が外交団をスペインから召還した)、カレロ・ブランコ首相暗殺など、国外では、イギリスとのジブラルタル問題の紛糾やアフリカにおける植民地(ギネア・イフニ)の喪失などにより、フランコ政権は末期的な混乱状態に陥り、とても株式会社法全面改正立法どころではなくなってきたからである。
- 2) 1979年は、法制度的には、スペインの言わば革命的新時代の幕開けである。すなわち、前年暮れに公布された新憲法の下で様々な改革が現実には制度化されていった。株式会社法の全面改正もその一つであるが、山積する法改正の課題の中でその実現に時間がかかるのは、立法当局として無理からぬところであった。加えて、1982年に社会主義政権が誕生したことは、政治的影響を受けやすい株式会社法改正作業に戸惑いを生ぜしめた(たとえば労働組合の経営参加要求)、他方、改正作業の強力な牽引役を果たしてきたスペイン商法学会の泰斗にして法典編纂委員会商法部会長のガリーゲス(Joaquín Garrigues Díaz-Cañabate)博士が1983年に死去したことも、作業の進展に少なからぬ影響を及ぼした。
- 3) ①資本金会社の設立に関する公示、業務執行機関の代表権および会社の無効に関する第1指令(68/151)、②最低資本金制度を含む株式会社の設立および資本の維持と変更に関する第2指令

(77/91)、③株式会社の合併に関する第3指令(78/855)、④資本会社の年度計算書類に関する第4指令(78/660)、⑤株式会社の分割に関する第6指令(82/891)、⑥結合企業における連結決算に関する第7指令(83/349)、⑦会計監査人の資格に関する第8指令(84/253)。

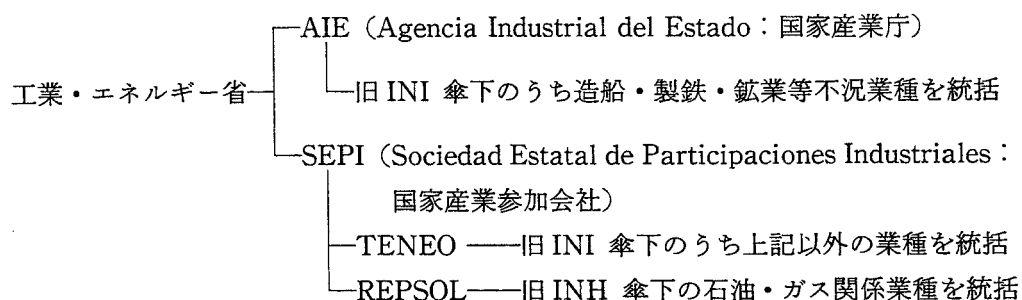
- 4) 立法勅令とは、国会の委任に基づき内閣が制定する法規範である。本立法勅令の場合は、商法典・株式会社法・有限会社法・商業登記規則など複数の法規範の改正を含む「会社についての商事立法の一部改正およびヨーロッパ経済共同体(EEC)指令への適合に関する法律」による立法委任が行われ、そこに含まれた株式会社法の部分が内閣の手によって整理されたものである。したがって、実質的には国会で制定された法律に他ならないが、形式的には、憲法の規定(第85条)により Decreto Legislativo(立法勅令)という名称を付さなければならないことになっており、1979年以降は、これに Real(英語の Royal)の語が付加される。
- 5) 公権力の組織が株式会社を設立するという事は、フランコ時代からスペインにおいて行われてきたことであり、たとえば工業エネルギー省に属する INI(全国産業団)や INH(全国炭化水素公団)という機関は、言わば国家持株会社として重要機関産業部門の企業を傘下に置き、他方、政府系の金融機関も株式会社形態を採ってきた(但し、最近これらの組織は大幅に整理統合された:別紙参考資料参照)。あるいはまた、株式会社として旅客運送などの公共事業を営む地方自治体も珍しくない。
- 6) 当時の登記・公証総局長が一人会社積極論者として有名なパス・アーレス(Cándido Paz-Ares)現マドリー・アウトローマ大学法学部教授であったことも指摘しておくべきであろう。

(以上)

(1995年11月13日(月) ヨーロッパ研究センター)

参 考 資 料

・INI (Instituto Nacional de Industria : 全国産業公団) は、1941 年、内戦により疲弊したスペイン経済を建て直す目的で、ファシズム統制経済下のイタリアにおける IRI (Istituto per la Ricostruzione Industriale : 産業復興公団) を模して設立された。フランコ政権下はもとより、その後の民主中道連合 (UCD) 政権、さらには現在のスペイン社会主義労働者党 (PSOE) 政権*の下でも、経済社会において重要な機能を果たしていた。INH (Instituto Nacional de Hidrocarburos : 全国炭化水素公団) は、いわゆるオイルショックの影響から、エネルギー部門強化の一環として、1981 年に INI から分離・独立させられた機関である。このような国家持株機構は、近時の構造不況下、合理化・民営化の流れの中で幾度かの整理統合を経て、1995 年より次のような構造に変容している (資料提供 : TENE0)。



AIE、SEPI、TENE0 は言わば純粋国家持株会社、REPSOL は民間資本を伴う事業持株会社。

*本報告後の 1996 年 3 月 3 日の総選挙の結果、PSOE は 14 年目にして下野、国民党 (PP) が政権党となった。

・各種事業者向けの特定の金融機関は、「公共融資の組織および制度に関する法律 (Ley de 19 de junio de 1971 sobre Organización y Régimen del Crédito Oficial)」第 24 条により、全額政府出資の株式会社たることが義務付けられている。これらの特殊会社に出資する政府機関は、INI および INH と並んでスペインの「三大持株会社」と呼ばれた、大蔵省の国有財産管理総局 (Dirección General del Patrimonio General) であったが、現在は同省所管の Argentaria という商号の持株会社である。

・INI、INH および国有財産総局が全額出資する会社も、ここいう公権力組織と同一視され、設立発起人の最低員数 3 名を要求する旧株式会社法第 10 条第 1 項の適用を免れた。さらに、これら完全子会社が単独であるいはいずれかの政府機関 (特に INI) と

共同で孫会社を設立する例も多かった。しかし、官民共同出資の混合経済(economía mixta)型——我が国でいう第三セクター——の株式会社の場合には、民間資本のみによる場合と同様、発起人は3名以上でなければならないとされた (Garrigues-Uría, “Comentario a la Ley de Sociedades Anónimas”, tomo I, Madrid, 1976, págs. 231-232)。